

2023
京都橘大学

「地域連携型教育プログラム」実績集

(「学まち連携大学」促進事業実績集)

(2023年4月～2024年3月)



京都橘大学
地域連携センター
Center for Regional Collaboration

目次：京都橘大学「地域連携型教育プログラム」実績集

はじめに	2
I. 「学まち連携大学」促進事業	
学まち採択内容のイメージ図および説明	4
【「見える!!地域連携」プロジェクト】	
学まちチャレンジ!プロジェクト 採択団体一覧と取り組み概要	5
実践例	
エコバッグDEエシカル古本市	6
書道を楽しくしっかり学ぼう!	7
山科図書館を盛り上げようプロジェクト☆	8
プロジェクト救～あなたの一瞬の勇気が誰かの一生に～	9
京焼・清水焼絵付けワークショップ	10
山科区の地域防災について考える	11
地域住民の交流を目的とした健康イベントの実施	12
イベント参加から考える地域の活性化	13
卒業生へのインタビュー事業／PROGテストによる学生の成長度測定事業	14
【「区民に身近な大学へ」プロジェクト】京都薬科大学との連携事業	
「景観喫茶」の実施と「たちばなこども食堂」への参加	16
京のやくたちばなし～健康で豊かに暮らすコツ～(全4回)	17
京都橘大学・京都薬科大学による合同多職種連携教育を実施	18
II. 地域連携活動	
実践例	
たちばなサイエンスデー 2023	20
たちばなこども食堂	21
移動販売車の受け入れスタート	22
「七夕陶灯路 2023」実施	23
醍醐中山団地「たちばな納涼祭」の実施	24
先端調査技術を導入した滋賀県高島市南畑古墳群の発掘調査	25
山科警察署員向けの英語講座	26
子どもの安全を十分に配慮し、協同しながら取り組む力の育成	27
京都府自死対策カレッジ会議に参加	28
祇園祭ごみゼロボランティア大作戦	29
『15Fies(いちごフェス)』の実施	30
コープしがの商品から考える地域のくらしと産業	31
ベーカリー事業売上日本一プロジェクト	32
「近江日野商人島崎の家」活用の試み	33
Art Under the Shijo への作品出展	34
地域住民による模擬患者へのフィジカルアセスメント演習	35
「看護お助けたい in 醍醐中山団地」の活動	36
たちばな健康相談	37
地域における『出張健康調査』の試み	38
カードゲームで「意味のある作業」を見つけよう	39
図書館との連携による地域に向けた認知症普及啓発活動	40
山科団地地区における世代間交流を用いたヘルスプロモーション	41
一次救命処置(BLS)と応急処置の普及活動	42
第1回 山科ふれあいあおぞら駅伝 運営・救護	43
一覧表	
その他の地域連携活動一覧(教育)(研究)(社会貢献)	44
III. 協定等	
自治体等との連携協力に関する協定の締結	56

京都橘大学
「地域連携型教育プログラム」実績集
（「学まち連携大学」促進事業実績集）
（2023年4月～2024年3月）



京都橘大学
地域連携センター
Center for Regional Collaboration

はじめに



岡田 知 弘
地域連携センター長

本格的な地域連携活動の再開

本書は、京都橘大学における 2023 年度の地域連携実績をまとめた報告書です。本年度は、昨年度までの新型コロナウイルス感染症にともなう行動規制が解かれ、地域の皆さんとの連携が多分野において実施できることになりました。引き続き、感染拡大に注意しながら、多くの学生や教員が参加した地域連携活動を展開することができました。それを象徴するのが、こども食堂の開催や京都府与謝野町と地域連携センターとの連携・協力に関する覚書の締結です。

第二期「学まち連携大学」促進事業の最終年度

本学は、2020 年度開始の第二期「学まち連携大学」促進事業（京都市）に採択されましたが、今年度はその最終年度、総仕上げの一年となりました。

本学は、すでに 2016～2019 年度において、京都市の「学まち連携大学」促進事業に採択され、学生と教職員が一体となって地域のみなさんとの協同の取組みを展開してきましたが、その実績が認められ、2020 年度からは「山科・醍醐地域で『変化を楽しむ』地域連携型教育プログラム」というテーマで、同じく京都市山科区に立地している京都薬科大学との共同事業を展開してきました。

2023 年度には、これまでの成果を踏まえ、次年度以降の事業にも継承することをねらい、多様なプロジェクトを展開してきました。例えば、学生公募型地域連携活動助成事業として「学まちチャレンジ！プロジェクト」事業を実施し、8つの学生グループが多彩な活動を展開しました。そのうち3つの外部機関との連携プロジェクトでは、地元の金融機関や社会福祉団体等と協力し活動しました。

さらに、京都薬科大学との連携による「区民に身近な大学へ」プロジェクトでは、昨年度に続き共同公開講座「京のやくたちばなし」（全4回）を開催し、両大学の教職員の協力によって、多くの参加者の好評を得ました。

学生たちの主体的な取組みを支援するために、「まちづくり研究会」を地域連携センターの一組織として位置付け、その自主性を尊重しながら、教員が集団で指導できる体制もつくりました。併せて、この間の調査によって、地域連携活動に参加する学生が、学習面においてもよい成果を上げていることも検証することができました。

地域連携センターを中心にした今後の活動に一層のご協力を

この第二期「学まち連携大学」促進事業の推進主体になっているのが、本学地域連携センターです。本学は 2005 年に男女共学化とともに教学理念を「自立・共生・臨床の知」と再設定して、「臨床＝現場＝地域」から学び、地域と共生することを謳いました。そしてこの方針のもと、地域との連携機能をより一層発展させるために 2014 年 4 月に地域連携センターを開設いたしました。

当センターとしては、学まち連携大学事業の成果を生かして、今後とも教職員や学生による多様な地域連携事業の展開と広報に努めていきたいと考えております。どうぞ、今まで以上に、本学の地域連携活動にご協力、ご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

I

「学まち連携大学」促進事業



2020～2023年度

「学まち連携大学」促進事業

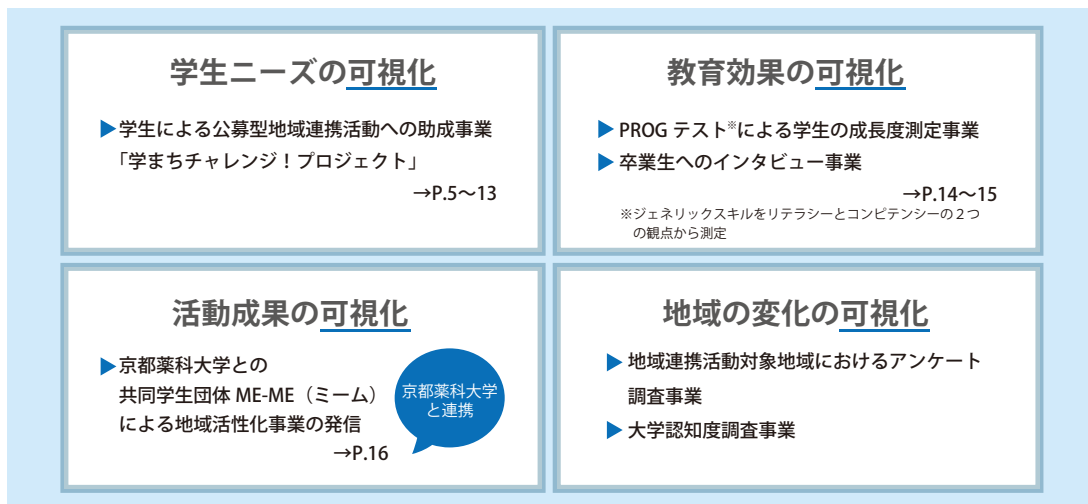
山科・醍醐地域で「変化を楽しむ」地域連携型教育プログラム

2020年度から2期目の採択を受け、新たなプログラムを展開しました。

「山科・醍醐地域で『変化を楽しむ』地域連携型教育プログラム」と題し、地域連携活動の可視化をテーマとした①「見える！！地域連携」プロジェクトと、京都薬科大学との連携による②「区民に身近な大学へ」プロジェクトの2つを実施しました。

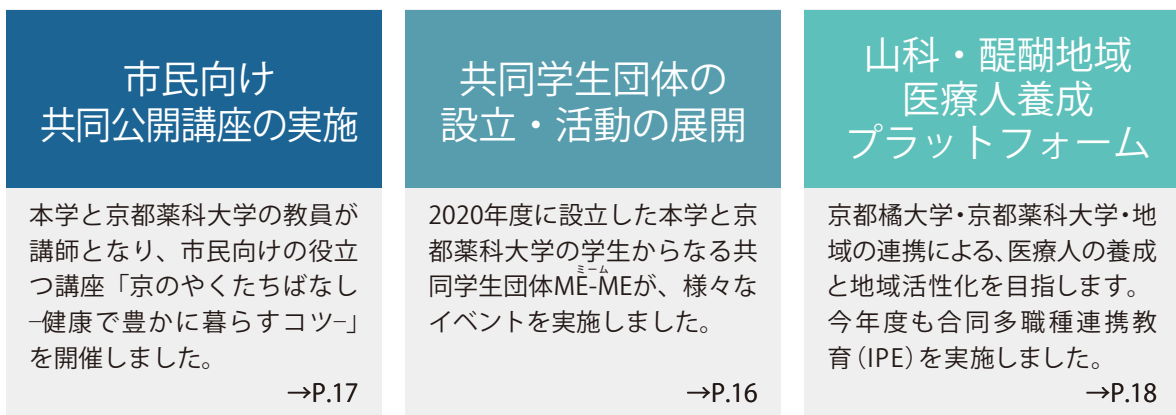
①「見える！！地域連携」プロジェクト

地域連携活動を下記4つの視点で可視化（見える化）に取り組みました。



②「区民に身近な大学へ」プロジェクト

「地域貢献」と「学生教育」の観点から京都薬科大学と連携し、下記の取り組みを実施しました。



京都薬科大学との連携でより身近な大学へ

■【「見える!!地域連携」プロジェクト】 学生ニーズの可視化

学生による公募型地域連携活動への助成事業

「学まちチャレンジ!プロジェクト」

本事業は、本学学生から応募される主体的な地域連携活動に対し助成を行うものです。

学生の地域社会における多様な学びを支援し、自主性・企画力・課題解決能力・コミュニケーション能力を培い、その活動をもって、地域貢献や大学活性化、学生文化の向上につながるよう実施するものです。

募集対象 地域社会への貢献を目的とした取り組み（対象地域は京都市内に限る）

応募資格 本学の正規学生（学部生、大学院生）で原則3名以上のグループ

2023 年度採択団体一覧

NO.	チーム名	プロジェクト名	概要
1	えしかるず橋	エコバッグDE エシカル古本市	「エシカル消費」をテーマに山科地域における地域の魅力を再認識してもらうとともに住みやすいまちの担い手となってもらえるような啓発活動としてエコバックづくりワークショップやエシカル古本市などを実施するプロジェクト
2	OSJ 橋	楽しくしっかり学ぼう!! ～地域に根づく書道～	地域の方に向けて、書道を楽しく学んでもらうための書道教室や書道イベントを実施するプロジェクト
3	京都橋大学図書館 情報学研究会 (略称:キットケン)	山科図書館を盛り上げよう プロジェクト☆	山科地域の子育て世代および子どもたちを対象に、お話の世界や本の魅力を様々な形式の表現で伝えるイベントや図書館利用者の満足度調査を実施するプロジェクト
4	救急救命サークル TURF	プロジェクト救 ～あなたの一瞬の勇気が誰かの一生 に～	山科地域の住民に心肺蘇生法の指導を行う救命講習を実施し、地域住民の一次救命処置 (BLS) への関心を高め、普及させるプロジェクト
5	まちづくり研究会	京焼・清水焼を活用した地域活性化	京焼・清水焼を活用した地域活性化を目的とし、地域住民に京焼・清水焼を購入、使用してもらい、京焼・清水焼が地域住民にとってなじみ深いものとなる方法を模索するプロジェクト

外部機関との連携型プロジェクト

NO.	連携機関	概要
1	山科区役所	山科区役所と連携し、防災意識を高めるためのアプローチについて検討し、地域の方の協力を得て、ワークショップを実施するプロジェクト
2	コミュニティ・バンク京信山科支店	コミュニティ・バンク京信山科支店と連携し、イベントを通じて健康や生活の安全の大切さを地域の方々に発信するプロジェクト
3	醍醐いきいき市民活動センター	醍醐周辺地域の子ども・子育て世代の交流を目的としたイベントに参加し、地域のつながりをどのように活性化させるかを考えるプロジェクト

■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

エコバッグ DE エシカル古本市

報告：えしかるず橘

プロジェクト内容

本プロジェクトでは、近年話題となっている「エシカル消費」をテーマに山科・醍醐地域の住民に地域の魅力を再認識してもらおうとともに、住みやすいまちの担い手となってもらえるような啓発活動を目指しました。

プロジェクトの目的は、①山科・醍醐地域の方に環境に配慮した生活の提案と、行動へのきっかけづくりを行うこと、②山科・醍醐地域の方に、住んでいる地域の魅力を再認識してもらおうきっかけづくりを創出することの2つです。目的達成のために今年度は「洛和会メディカルフェスティバル」や「たちばなサイエンスデー」「たちばなこども食堂」にて3つの企画を行いました。

①エコバッグづくりワークショップ

参加者にスタンプやペンを使ってオリジナルのエコバッグを作成してもらいました。

②山科推し缶バッジづくり

えしかるず橘が作成した8種類の山科魅力パネル（「もてなすくん」や「京焼・清水焼」など山科の魅力や特徴を絵にしたものと簡単な説明を書いたもの）の中から推しを選択して缶バッジを作成し、エコバッグに取り付けてもらいました。

③エシカル古本市

今年度の新しい取り組みとして、作成したエコバックをすぐに使ってもらうために古本市を併設しました。本プロジェクトは親子の参加者が多いため、絵本や児童書を中心に保護者向けの小説などジャンルは問わず様々な本を用意しました。大学内に古本回収ボックスを設置したり、廃校となった小学校から寄付してもらったりして様々な本を集め、足りない分野の本は古本屋で購入しました。

イベント当日は、エコバッグを作った方には1冊、読まなくなった本を持参してくださった方には持参された冊数分の本を選んで交換という形で古本の循環を行いました。

プロジェクトの成果と学び

エコバッグワークショップでは楽しんでもらうだけでなく、「学校に持っていく」など実際に使ってみたいという声をたくさん聞くことができました。イベントに参加した方からは、「以前参加したときに作ったエコバッグを使っています」と声を掛けていただき、少しではあるもののエシカル消費の輪の広がりを感じることができました。缶バッジワークショップでは山科地域について老若男女問わずたくさんの方に興味を持ってもらうことができました。

古本市では、まず本が集まるか不安でしたが、大学内の古本回収ボックスや、廃校となった小学校からの寄付など想像をはるかに超える冊数を集めることができました。イベント当日には、参加者が持参して交換した本を別の参加者が気に入って自分の本と交換して嬉しそうに帰っていく姿を見て、小さな規模ではあるものの、山科の中で古本が循環していく姿を見ることができました。

今年度は初めての取り組みや、初めて参加するイベントもありましたが、しっかりと計画を立てたうえで、まずは行動してみる大切さを学びました。不安な点も多くありましたが行動を起こすことで協力してくださる方は多くいると改めて感じました。

今後の展開

今後のイベントでは、より環境について考えてもらえるようなイベントにしていきたいと考えています。また、来年度からは代表の交代やメンバーの卒業があるため、新たなメンバーの確保など、えしかるず橘という団体を継続できるよう努力していきます。



■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

書道を楽しくしっかり学ぼう!

報告: OSJ橘

プロジェクトの内容

OSJ橘は、文学部日本語日本文学科書道コース有志の学生による団体です。多くの人に筆を持つ機会を作って書道の良さ・楽しさを広めたいと思い、学まちチャレンジ!プロジェクトに参加しました。子どもの字の上達、書道の基礎、書道を通しての集中力の向上を目標とし、筆を持つ機会が少ない子どもたちにとって書道を学びきっかけになるよう、また、大学で学んだ知識や技術を活かし、地域に貢献できるよう活動しています。

プロジェクトの成果と学び

今年度は、たちらボ山科での書道体験会の継続、イオンタウン山科樹辻とラクト山科でのイベント実施、新型コロナ明け初の書道パフォーマンスに挑戦しました。

たちらボ山科での書道体験会は毎月2回行っています。参加者からは「楽しかった」「子どもの成長が分かるからとても良い」というお声を頂きました。子どもたちが「〇〇の字を書きたい」と積極的に取り組む姿勢も見られました。また、季節に因んだ言葉など一人ひとりの要望に合わせたお手本を作成することで、より丁寧な指導を心掛けました。

また、イオンタウン山科樹辻とラクト山科でイベントを開催しました。色紙づくり、リクエスト色紙、紙コップ工作、思い出フレーム、ブンブンごま制作、紙皿カスターネットのほか、季節に合わせてうちわ作り、紅葉のしおり作りなども行いました。工作を取り入れることで、書道未経験者でも気軽に参加できる環境を作り、幼児からご年配の方まで幅広い世代に参加して頂きました。保護者の方からは「大学生がこのようなイベントを開催しているのはとても良いと思う」「また参加したい」というお声を頂きました。とても充実したイベントだったので、今後も継続していきたいです。

1月には六地蔵にあるMOMOテラスで開催された醍醐味eetsで書道パフォーマンスにも挑戦しました。たくさんの方々に囲まれながらオープニングとエンディングの計2回書道パフォーマンスを行い、その間の2時間で書道体験会を行いました。体験会にはパフォーマンスを見た後に来て頂いた方も多く、「かっこよかった」「感動しました」などのお言葉を頂きました。幅広い世代の方々にご参加頂き、筆を初めて握るお子さんや久しぶりに書道をしたいと言って来てくれた方もいました。このイベントを通して、色々な方に魅力や楽しさを知って頂けたと思います。

今後の展開

今後はたちらボ山科(書道体験会)で硬筆も行いたいと考えています。毛筆と硬筆を選べる形にすることで活動の範囲が広がると思います。また、OSJメンバーが増えたため、できるイベントが増えたことはこれからの活動の拡大につながると思います。現在の課題は、書道体験会の参加人数が月によって差があることです。今後は、SNSでの情報発信をさらに強化し、イベントをする際に書道体験会の宣伝も積極的に行いたいです。

今後の目標は、連携している企業も増えてきているので昨年より活動域を広げ、「継続」することと更に新たなことに「挑戦」していくことです。またOSJメンバー全員が子どもたちに分かりやすく教えることができるように、メンバー同士で教えあいながら技術を高めていきたいと思っています。



■学まちチャレンジ!プロジェクト

山科図書館を盛り上げようプロジェクト☆

報告：京都橘大学図書館情報学研究会(略称：キットケン)

プロジェクト内容

図書館情報学研究会は、昨年度に続いて2年目の参加です。今年度のプロジェクトでは、山科図書館への新規来館者の増加、子どもたちに図書館の魅力を伝えることを目標に、秋と冬に「おはなし会」を行いました。絵本や紙芝居の読み聞かせ、手作りのペープサート、エプロンシアターを上演し、昨年度を上回る盛り上がりを見せました。

また、図書館運用に貢献する意識調査を行い、結果を図書館にフィードバックしました。

プロジェクトの成果と学び

おはなし会の参加者は、秋は約15人、冬は約30人と、予定を大きく上回りました。昨年度の選んだ本と実際に参加した子どもの年齢層が一致しなかったという反省点を踏まえ、今年度は事前に複数の作品や大型絵本を準備するなど工夫し、昨年度よりバージョンアップした読み聞かせを行うことができました。

また、立体的なものを使うことで子どもたちが飽きずに集中して見てくれるのではないかと考えて、ペープサートやエプロンシアターの上演にも挑戦しました。どの年齢層でも楽しめるように、ペープサートでは「変身トンネル」、エプロンシアターでは「てぶくろ」を選びました。子どもたちは演目に興味津々で、時には声を上げて笑ってくれたり、楽しかったと感想を伝えてくれたりと大好評でした。また、保護者にも好評で喜んでいただくことができました。

今年度のプロジェクトでは、参加者の年齢層を考慮して利用者が何を求めているのかを客観的に分析する大切さを学びました。その結果、より多くの人に本や図書館の魅力を伝えることができたと感じます。

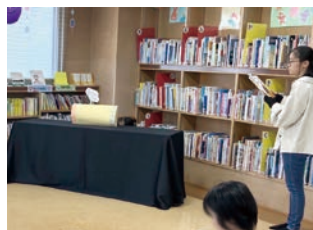
おはなし会の他にも、図書館運営に貢献することを目的として利用者アンケートを実施しました。図書館の利用目的や来館頻度、普段どのぐらいの本を読むのか、好きな本のジャンルなど全8個の質問を用意し、63件の協力を得ました。「山科図書館はどのような存在か」という質問には「親しみやすい馴染みの場所」「知る喜び、読む喜びを得られる場」という回答が多く見られました。また、「読書や図書館にまつわる思い出」という質問には、子育て中に子どもを連れてきた人や思春期の子どもとの会話のきっかけになった人、コロナ禍での一時休館が寂しく辛かった人、思い出の本や新しい本に出会った人など、様々なエピソードが見られました。特に子育てに関するエピソードからは、子どもたちの成長に図書館が関わっていることが感じられます。

これらの回答からも図書館の役割が「本を借りる場」だけでなく、「人々の安らぎの場所・子どもたちの成長の場」としても機能していることがわかります。

今後の展開

課題は、読み聞かせが始まる前の時間を利用して子どもたちと距離を縮めておくことができなかったことです。例えば、読み聞かせ前に手遊びをするなど、これから何が始まるのかというドキドキを感じてもらい、興味と親しみを持ってもらえるよう、読み聞かせの導入にも工夫をしたいと思います。

また、子どもたちにより夢中になってもらえるように、私たちの技術面を向上させ、参加者の反応を見ながらイベントを進めることを目標にしたいと思います。



■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

プロジェクト救～あなたの一瞬の勇気が誰かの一生に～

報告：救急救命サークルTURF

プロジェクト内容

このプロジェクトは、山科地域の住民に救命講習を実施し、地域住民の一次救命処置への関心を高め、普及することを目的としたものです。一般市民の一次救命処置実施率が非常に低いことを知り、救えるはずであった命が簡単に失われる現状を少しでも改善したいという思いから2023年度の学まちチャレンジ!プロジェクトに参加しました。

今年度の活動では、10歳未満の子どもから80歳以上の高齢者まで、約80人の方々に受講していただくことができました。

プロジェクトの成果と学び

プロジェクトでは、イオンタウン山科柳辻で行われた「たちばなこども食堂」や同じ学まちチャレンジ!プロジェクトのコミュニティ・バンク京信山科支店チームと合同で行った「ふれあい健康イベント」など、様々なイベントに参加しました。イベントでは、胸骨圧迫の方法や自動体外式除細動器（以下、AED）の使用方法など、実技中心の講習を実施しました。

子どもがたくさん参加するイベントでは、保護者の方から子どもの異物除去法について質問していただくことがありました。救命講習は成人を対象としたものが多く、小児・乳児を対象としたものは少ないため、小さな子どものいる世代に需要が高いことが分かりました。このことから、講習参加者の世代に合わせて異物除去法や、季節に合ったテーマなどを加えると、参加者の興味を引くことができ、受講者増加につながるのではないかと考えました。

また、女性の傷病者にAEDのパッドを貼る際の問題点や、AEDの安全性についての質問もありました。こういった疑問は、誰もが一度は考えるものだと思います。そして、この疑問は一般市民が心肺停止傷病者に対して一次救命処置を実施する際の障壁の一つとなっているのではないかと感じました。今年度のプロジェクトは実技中心の講習だったため、このような疑問や不安を払拭することを今後の課題として考えています。一般市民の方に一次救命処置を普及させるためには、実技だけでなく正しい知識を伝えることが必要だと強く感じました。

今後の展開

今年度の活動を通して、実技中心の救命講習だけでは救助者自身の不安や疑問を解消することが難しく、一般市民の一次救命処置実施率の向上につながりにくいと感じました。

今後は、イベントに参加するだけでなくTURF主催の救急救命講習会の開催にも挑戦してみたいと感じました。実技だけでなく知識を伝えることのできる講習会のプログラム作りに挑戦したいと思います。



■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

京焼・清水焼絵付けワークショップ

報告：まちづくり研究会

プロジェクト内容

まちづくり研究会は2001年から京焼・清水焼の組合や職人・作家などと連携し、伝統産業の振興と地域のアイデンティティの創出に取り組んできました。2006年からは清水焼の茶碗に灯りをともしたイベント「陶灯路」を実施し、地域の魅力を発信してきました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響によりコミュニケーションが制限され、伝統産業への理解や地域との連携に課題が生じています。

このプロジェクトでは、京都市山科区の伝統産業である京焼・清水焼を活用し、京焼・清水焼に関わる方々とのコミュニケーションを通じて、地域の活性化を目指しました。

プロジェクトの成果と学び

2023年度は、7月の「たちばなサイエンスデー」、10月の「洛和メディカルフェスティバル（洛和会音羽リハビリテーション病院）」、と12月の「たちばなこども食堂」で京焼・清水焼の箸置き絵付け体験を実施し、多くの方に参加していただきました。アンケートでは京焼・清水焼の認知度も高く、イベント満足度においても高い評価を得られました。一方で、京焼・清水焼の絵付け体験であることや、まちづくり研究会の活動に対する認知度はあまり高くなく「どこが主催しているイベントなのかわからない」という意見もいただきました。今後は絵付け体験の楽しさだけでなく、京焼・清水焼に興味を持ってもらえるような工夫と、まちづくり研究会の活動についても認知度も高めていく必要があると考えています。

また、本プロジェクトに参加することで、絵付け体験のイベント運営に携わったメンバー自身の「京焼・清水焼」への関心と、地域と関わり交流することへの意識が高まりました。

今後の展開

まず、京焼・清水焼を用いた活動であることを認知してもらうために、京焼・清水焼の歴史や特徴、伝統的な絵付け文様の紹介などを記したパンフレットを作成します。また、ポスターやチラシを作る際には、京焼・清水焼を用いたイベントであることが分かるように記載します。

次に京焼・清水焼の職人や作家とのコミュニケーションの場が少ないことが課題なので、絵付け体験の具体的な企画を立てるために、京焼・清水焼の職人の方々と意見交換を行います。また、京焼・清水焼の歴史や現状、課題についてのレクチャーや、これまでの山科地域活性化への取り組みについてもヒアリングを行います。これからは学生が気軽に清水焼団地に足を運び、コミュニケーションがとれる関係を築けるような仕組みを考えたいと思います。



■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

山科区の地域防災について考える

報告：山科区役所×学生有志

プロジェクト内容

本プロジェクトの目的は、山科区役所と連携して山科区における地域防災のあり方について考え、幅広い世代が参加しやすい新しい形の防災訓練を検討・提案することです。検討した結果、災害時を想定した訓練を行う前に、ゲームを使って地域住民の防災に対する意識を高めることや地域防災の重要性を伝えたいと思い、防災ワークショップを実施しました。また、ワークショップ後には参加者と防災についての意見交換も行いました。

プロジェクトの成果と学び

今回のプロジェクトでは、山科区役所の防災担当の方と山科区山階南学区の地域住民の方と一緒に、地域防災について考えるための防災ワークショップを2024年1月19日に京都市東部文化会館にて実施しました。ワークショップでは、最初に山科区に住む高齢者数等の山科区の特徴を具体的な数値を用いて参加者に説明しました。災害が起こった時に最初に力を発揮するのは被災現場にいる地域住民であるということ、地域住民の適切な防災行動によって被害を少なくすることができることなどを説明し、今回のワークショップの目的である「地域防災の重要性を理解してもらうこと」「地域防災に関してどのような取り組みができるのかを考えること」を伝えました。

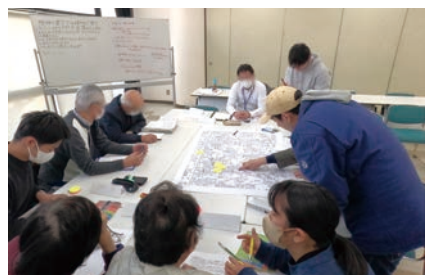
次に、クロスロードゲームという防災に関連したクイズを利用して、参加者がどれだけ防災に関する知識を持っているのか、山科区の地域の特徴をどこまで把握しているのかを全員で共有しました。クロスロードゲームとは、阪神・淡路大震災で災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに作成された、カードゲーム形式の防災教材です。カードの問題には災害時に起こり得る状況で、どちらを選んでも何らかの犠牲を払わなければならないような「ジレンマ」が多数存在します。正しい答えを選ぶのではなく、他者がその答えを選んだ理由を聞くことで、様々な価値観や視点に出会うことができるため、今回のプロジェクトの目的にぴったりだと思い選びました。その後、参加者にクロスロードゲームで挙げられた災害時の状況を山階南学区の地図にマッピングをしてもらい、山科区の災害時における情報の管理方法や、山階南学区が被災した際の避難経路を確立するための情報をまとめました。

ワークショップには、山階南学区の自治会役員の方にも参加していただき、地域住民しか知らないことなども聞くことができました。また、参加者の方々から、「大学や大学生が高齢化の進む地域と積極的に関わってくれることがうれしい。」という意見もいただきました。

今後の展開

今回のプロジェクトを通して、地域の防災について考えるイベントを実施することで、地域住民の方々に防災に対する知識が身につくという実際の災害時に役立つことができるのではないかと感じました。また、山科区役所の方など防災訓練を運営する立場の方と意見交換をすることで、その地域に合った防災活動ができることを学びました。

漠然と防災訓練を行うのではなく、ワークショップも実施するなどして防災に関する知識も身につけられるような活動を広めたいと思いました。



■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

地域住民の交流を目的とした健康イベントの実施

報告：コミュニティ・バンク京信山科支店×学生有志

プロジェクト内容

本プロジェクトはコミュニティ・バンク京信山科支店（以下 京信山科支店）と連携し、山科地域の活性化を目的とした活動を展開するもので、地域連携活動に関心を持つ京都橘大学健康科学部作業療法学科の有志学生によって結成されました。

京信山科支店のコミュニティルームにて主に高齢の方を対象に、健康に関連する講話、ものづくり、体操を9月、11月、12月の計3回実施しました。講話は、京都府山科警察署の方による特殊詐欺への対処方法や救急救命サークルTURFによる救急救命講習会、京信山科支店インターンシップ生による「コピー製品における中国の実情」をテーマとしました。ものづくりでは、夏はマイうちわづくり、秋は松ぼっくり・どんぐり工作、冬は毛糸ツリーづくりを実施し、季節の移り変わりを実感していただけるようにしました。また体操では、頭の体操と身体の体操を行い、頭の体操ではクイズ、身体の体操ではコグニサイズ*やタオル体操を実施しました。体操を行う目的を医学的な知識と関連させて説明することで、より積極的に体操に参加していただけるよう工夫しました。

※コグニサイズ：国立長寿医療研究センターが開発した運動と認知課題（計算、しりとりなど）を組み合わせた、認知症予防を目的とした取り組みの総称を表した造語

プロジェクトの成果と学び

今回のプロジェクトでは、第1回23名、第2回18名、第3回9名の方にご参加いただきました。企画を通して参加者の交流を促すことができ、「このようなイベントがもっとあればいいのに」「季節を感じられる素敵なイベント」などうれしいお声をいただきました。

今回のプロジェクトを通して、地域のつながり作りのためには連携が大切であることを学びました。京信山科支店のコミュニティルームという、駅から近くアクセスの良い場所でイベントを実施することで、京信山科支店のお客様や大学まで来ることが難しい方にも参加いただくことができました。また、他の学生団体と協力することで自分たちだけでは実現できない企画を実施することができました。それぞれの視点からアイデアを出すことやお互いの強みを活かすことは、より良いイベントを実施することにおいて重要であると感じました。さらに、地域を対象としたイベントは参加者の方の生きがいになると知り、イベントの必要性・重要性を学ぶことができました。

今後の展開

参加者との交流を通して、今回のような活動を望む声がある一方で、そのような機会が少ないことがわかりました。参加者同士のつながりがイベントの中だけでなく地域活動への広がりや発展するためには、継続的に活動できる機会が必要であると考えました。より多くの方に継続的に参加していただくために、早めの広報活動やイベント当日に集まってくださった方にアナウンスやアンケートで次回イベントの告知を行うと良いのではないかと考えました。また、余裕をもった時間配分をしておくこと、全体に進行を伝えるための方法を検討しておくこと、スタッフの立ち位置や役割を明確にしておくことでイベントを円滑に進行し、参加者の交流を促していきたいと考えました。



ものづくりを行っている様子



救急救命サークル TURF による
救急救命講習会の様子



救急救命サークル TURF の皆さんと
撮った集合写真



身体の体操を行っている様子

■ 学まちチャレンジ!プロジェクト

イベント参加から考える地域の活性化

報告：醍醐いきいき市民活動センター×学生有志

プロジェクト内容

このプロジェクトは、醍醐いきいき市民活動センターと連携して同センターが主催するイベントの賑わいづくり、醍醐地域の魅力に気付くきっかけ作りを目的として、醍醐地域における市民活動のあり方について実践的に学ぶ取り組みを行いました。今年度は、醍醐地域の市民活動団体の交流にどのような効果があるのかを感じ取ること、醍醐地域の住民に市民活動の楽しさを浸透させることを目標として、醍醐いきいき市民活動センターが主催する8月の「だいがゆめもり夏祭り」と12月の「醍醐いきいきフェスティバル」に参加しました。

プロジェクトの成果と学び

醍醐いきいき市民活動センターで開催された「だいがゆめもり夏祭り」では、子ども遊びブースを担当し、約250人が参加してくれました。遊びブースでは「宝探し」「輪投げ」「ダンボール迷路」「スーパーボールすくい」を企画しました。「宝探し」では、施設内を移動するスタッフを探してもらい、様々な場所を知ってもらえるよう工夫しました。全てのブースを回った子どもには手持ち花火をプレゼントし、夏祭り終盤で催される花火の時に楽しんでもらえるようにしました。

パセオ・ダイゴローで開催された「醍醐いきいきフェスティバル」では、子ども遊びブースとして「宝探しゲーム」を実施し、約40人が参加してくれました。「宝探しゲーム」は、木の棒を使い檻から宝石や化石を取り出すゲームです。「穴埋めクイズ de 醍醐の魅力発見!」と称したクロスワードパズルクイズに正解した人が「宝探しゲーム」に参加できるようにしました。醍醐の魅力や取り組みを伝えられるようにクイズの答えを醍醐地域に関連する言葉にしました。このクイズを通して醍醐地域の魅力を少しでも多くの方に伝えることができたと思います。

どちらのイベントでも、子どもたちからは「もう一回したい」「楽しすぎて疲れた」、保護者からは「子供が夢中になってくれている」「斬新な考え方で面白い」といった声をいただきました。コロナ禍が明けて子どもたちが楽しめるイベントが少しずつ増えてきましたが、子どもたちの楽しみの場の1つになれたのではないかと思います。

この経験を通して、地域コミュニティ拠点の意義やあり方や課題などを実感し、市民活動の可能性や課題について考えることができました。

今後の展開

今回のイベントを通して、醍醐地域住民の方が地域の魅力を知らない、気づいていないと感じました。また、醍醐いきいき市民活動センターでイベント報告会に参加させていただいた際に、まちづくり担当の方からは地域住民や若い方との関わりが少ないというお話を聞きました。これらのことから地域の魅力を伝えること、世代を超えた地域住民間の交流を活性化させることが今後の課題だと感じました。

イベント参加者は地域の方と交流できる場があることを喜んでくれていたので、これからは年齢に関係なく楽しめるイベントを企画し継続していくことで地域連携、地域活性化につなげていきたいと思います。



【「見える!!地域連携」プロジェクト】教育効果の可視化 卒業生へのインタビュー事業

在学中に地域連携活動に取り組んだ卒業生は、必ずしもその活動と直結した進路に進む者ばかりではありませんが、学生時代の地域連携活動で得た学びは現在の社会人生活の中で必ず生きていると思われまます。そこで、地域連携活動を通じた教育効果の可視化を目的に、在学中に積極的に地域連携活動に取り組んだ卒業生に対するインタビューを行い、在学中の地域連携活動がその後の社会人生活にどのように生かされているかを聞き、その中から今後の地域連携活動と教育のあり方について考えることとしました。

2021年度から2023年度まで実施したこのインタビューは、理学療法学科、英語コミュニケーション学科（現・国際英語学科）、歴史学科、歴史遺産学科、児童教育学科、現代マネジメント学科救急救命コース（現・救急救命学科）、看護学科、心理学科（現・総合心理学科）の各学問領域の卒業生10名に対して行われました。

インタビュー記事は右記二次元コードよりホームページを参照ください。



卒業生インタビュー（ダイジェスト版）

品田 真孝 さん（児童教育学科 2010年度卒業生）
現在の所属：特定非営利活動法人
山科醍醐こどものひろば 事務局長

学生時代に「げんKids★応援隊」という学生団体に所属し、地域の子どもたちと遊ぶ企画を立案、実施していました。活動していく中で知り合った地域住民の方々から徐々に様々なイベントに呼んでもらえるようになり、そのイベントに合った企画をメンバーと相談しながら一から考えました。企画をつくり上げていく大変さと楽しさの他にも、資金の確保や管理、チラシ配布などの広報、保護者への連絡、参加者の安全確保などについてもたくさん学びました。



品田 真孝さん

山本 ちさと さん（理学療法学科 2015年度卒業）
現在の所属：洛和会丸太町リハビリテーションクリニック勤務
理学療法士

学生時代に「スポーツリハビリテーションサークル」に所属し、地域の小学生に対してストレッチを教えたことがコミュニケーション能力を鍛える機会になりました。もともと人前で話すことが不得意でしたが、少し自信を持てるようになり職場でもこの経験がとても役に立っています。



山本 ちさとさん

眞野 一樹 さん（現代マネジメント学科救急救命コース 2016年度卒業生）
現在の所属：箕面市消防本部豊能消防署

学生時代に「救急救命サークルTURF」に所属し地域のイベントや町内会のお祭り等に救護要員として参加していました。イベントに派遣するメンバーの人員配置やシフト組みなどの調整などが大変でしたが、このような経験は現在の職場において様々な企画を立てるときに役立っています。規模が大きな訓練を計画する場合、詳細な起案書を作成し上司の決裁を得る必要があります。段取りや準備に時間がかかることから自ら企画を立てる職員は少ないですが、私は大学時代の経験があるので訓練の企画立案を進んで引き受けています。



眞野 一樹さん（写真左）

地域の方々とコミュニケーションを取ることが成長につながる

インタビューに協力してくれた卒業生は、様々な地域連携プロジェクトに参加し、その中で大きな成長を遂げたようです。例えば、子どもや高齢者、障がい者、地元企業家との対話を通じて「ゆっくりと相手の話に耳を傾ける傾聴力が身についた」と述べる卒業生もいました。また、地域住民との打ち合わせを通じて「目的意識を持った対話ができるようになった」という声も多くありました。様々な地域連携プロジェクトに参加することで実践的なコミュニケーション能力を身につけ、成長につなげることができた実感していることがわかります。

学生の実践力と企画力の向上

卒業生は自主的に様々な活動を企画し、実践してきました。自ら事業を運営する中で「企画立案力や運営力が身についた」という意見などがあり、学外での活動が実践力や企画力の獲得に繋がっています。その他、地域住民アンケートの設計や実施、集計・分析を通じて「調査手法を体得できた」という具体的なスキル獲得の報告もあり、社会で直接役に立つ能力の獲得につながった例も聞くことができました。

地域連携における大学のサポートの必要性

卒業生たちは活動を行う上で大学のサポートが不可欠であると強調しています。具体的には活動支援の物品や資金面でのバックアップ、教員による助言や指導、事務局の運営面でのサポートが挙げられています。学生たちは大学の支援があったからこそ、より意欲的かつ効果的に地域連携活動に取り組むことができたようです。例えば、「大学が提供する地域のネットワークを活用することで、地域連携プロジェクトがスムーズに進行できた」と答える学生もあり、大学のソフト・ハード両面の支援が学生の地域での学びに重要な役割を果たしていることがわかります。

まとめ

学生が在学中に行った地域連携活動が、その後の社会生活の中でどのように生かされているかを確認することを目的とし、今回の卒業生インタビューを行いました。

実践的なコミュニケーション能力を身につけた者、企画立案力や運営力を身につけた者、アンケートの設計・実施などにより具体的な調査手法スキルを身につけた者など、学生たちはそれぞれに多くのことを学び、その後の社会生活に生かされていることが報告され、在学中の地域連携活動の経験が将来において有益であることが示されました。また、大学によるサポートが非常に重要な位置にあることも明らかになりました。

こうした結果を受け、今後も地域との連携をさらに強化し、学生がより一層学び成長できる環境を整えていきます。

■【「見える!!地域連携」プロジェクト】教育効果の可視化

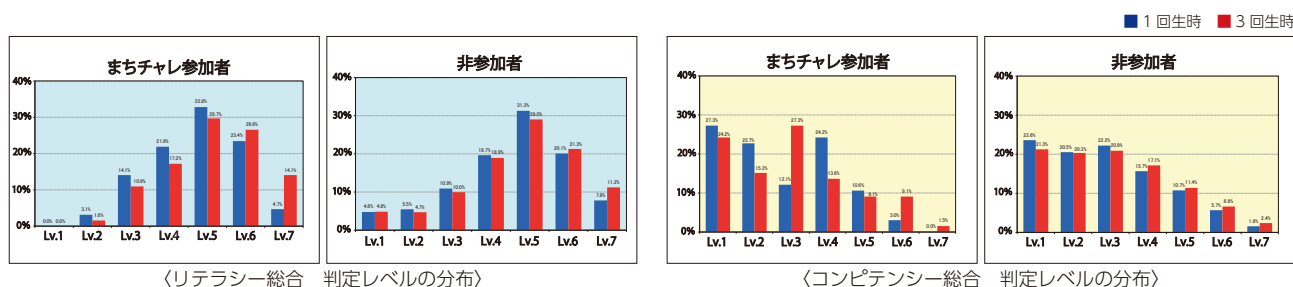
PROG テストによる学生の成長度測定事業

PROGは、河合塾と株式会社リアセックが共同開発したジェネリックスキルの成長を支援するアセスメントプログラムです。専攻・専門に関わらず、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向=ジェネリックスキルを測定・育成します。テストでは、「リテラシー」と「コンピテンシー」の2つの観点から測定し、自身の現状を客観的に把握することができます。

「リテラシー」では、新しい問題やこれまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力を情報収集力や情報分析力など6つに分類したうち、4つの能力で測定します。

「コンピテンシー」では、周囲の状況に上手に対応するために身につけた意志決定の特性や行動スタイルを確認します。

本学では、1回生時と3回生時にこのPROGテストを実施しています。「PROGテストによる学生の成長度測定事業」では「学まちチャレンジ!プロジェクト」に参加した学生（以下、まちチャレ参加者）と参加していない学生（以下、非参加者）の1回生時と3回生時の結果を比較しました。（グラフは株式会社リアセック提供）



「PROG テストによる学生の成長度測定事業」の結果

リテラシー総合における上位レベル：Lv.6・7の占める割合（構成比）について、1回生時のまちチャレ参加者では28.1%、非参加者では27.9%と両者に差はありませんでした。しかし、3回生時には、まちチャレ参加者では40.7%、非参加者では32.5%と大きく差が開く結果となりました。

コンピテンシー総合においては、まちチャレ参加者の1回生時はLv.1・2の学生が50%と、下位層の学生の占める割合が高くなっていましたが、3回生時にはLv.1・2が39.4%と1回生時から10.6%減少しました。また、上位層においてはLv.5～7の割合が13.6%から19.7%と6.1%増加しています。一方、非参加者においては1回生時と3回生時の分布に大きな変化は見られませんでした。

このPROGテストの結果からも、在学中の地域連携活動が、学生の成長に大きく寄与していることが分かります。

■【「区民に身近な大学へ」プロジェクト】京都薬科大学との連携事業

共同学生団体 ME-ME (ミーム)

「景観喫茶」の実施と「たちばなこども食堂」への参加

報告：京都橘大学学生有志×京都薬科大学学生有志

共同学生団体 ME-ME について

共同学生団体ME-ME (ミーム) とは、京都橘大学と京都薬科大学が連携し、2020年に発足した団体です。両大学の学生が主体となって、イベントを企画運営し、山科・醍醐地域の活性化を目指して活動しています。

「景観喫茶」の実施

「景観喫茶」とは、公園や寺院などが集まる場所でお茶を飲みながら会話や読書を楽しむ、中国・成都の屋外喫茶文化である「茶座」をモデルにしたものです。公園を活用するきっかけづくり、地域住民たちの交流の場の創出を目的として、2023年度も山科区にある東野公園にて8月21日と12月2日の計2回開催しました。

夏の「景観喫茶」では、山階南学区の公園体操に参加された高齢者を中心に35名の方に参加していただきました。風鈴を設置したり、うちわを作ったり夏らしい要素を取り入れたワークショップや、山科で作られた器や苔を使った苔玉作りなど、地域性を取り入れたワークショップも行いました。参加者からは「体操後にこのような催しがあると聞き楽しみにしていた」「交流の場づくりのために、公園の新しい活用方法としてこの景観喫茶を参考にしたい」という感想をいただきました。

秋の「景観喫茶」では温かいお茶の提供、巨大シャボン玉づくり、公園内の草花や実を探すビンゴゲームの3つをメインに実施しました。寒い時期であるため公園の利用者は少ないと予想していましたが、74名の方に参加していただきました。ビンゴは2パターンを用意しました。難易度を高めに設定したため、長い時間、公園内を探し回って楽しんでもらったのではないかと思います。

「たちばなこども食堂」への参加

9月9日にイオンタウン山科柳辻で行われた「たちばなこども食堂」に参加しました。ルールや遊び方が簡単で、年齢関係なく参加できるものとして輪投げとくじ引きを選びました。山科のことを知ってもらうために、山科のマスコットキャラクターである「もてなすくん」のイラストを土台に装飾しました。当日は、大人も輪投げに挑戦してくれたり、高得点が取れるまで何度も遊んでくれる子どもがいたり、合計114名の方に楽しんでいただくことができました。

また、12月10日に京都橘大学内で開催された「たちばなこども食堂」では、わたがしブースを担当しました。山科区の子ども食堂を紹介するブースでチラシと一緒にわたがし券を配布し、4つの味から好きなわたがし1つと交換する仕組みで、計101個を配布しました。会場では、カラフルなわたがしを持って写真を撮ったり、友達や家族と味を交換したりと、子どもから大人まで楽しそうな様子がたくさん見られました。

今後の展開

新たなメンバーの加入と、SNSを活用した広報活動にも力を入れたいと考えています。そして活動の幅を広げ、山科・醍醐地域において、様々な課題に対して積極的にアプローチしていきます。今後も地域住民が参加しやすく、かつ具体的な成果を生むような企画を検討します。



たちばなこども食堂 (12月)
わたがしブース



景観喫茶 (東野公園)



景観喫茶 (東野公園)



たちばなこども食堂 (9月)
輪投げとくじ引き

【「区民に身近な大学へ」プロジェクト】京都薬科大学との連携事業

市民向け共同公開講座

京のやくたちばなし ～健康で豊かに暮らすコツ～ (全4回)

概要

市民向けの公開講座「京のやくたちばなし」は、本学と京都薬科大学が①両大学の知的資源の社会還元、②山科・醍醐地域の住民への両大学の存在感の向上、③両大学の交流促進、を目的として、2021年度より実施しています。

2023年度は子育て世代から高齢者まで幅広い年代の方にも興味を持っていただけるよう、以下のテーマで全4回開催しました。

2023 年度報告

第1回「すこやかに暮らすためのやくたちばなし」

日 時：2023年7月29日（土）

参加者：53名（対面23名・オンライン30名）

・幸齢のすすめ ～現代における幸福な老いとはなにか～

講師：岸 太一（京都橘大学 総合心理学部 総合心理学科 准教授）

・運動ですこやかに良い人生をかさねる ～サクセスフル・エイジングと高齢者の心臓リハビリの取組みから～

講師：長澤 吉則（京都薬科大学 基礎科学系 健康科学分野 准教授）



第2回「子どもの学習に関するやくたちばなし」

日 時：2023年9月9日（土）

参加者：44名（対面19名・オンライン25名）

・どうして英語力と科学理解力が必要なのか？

講師：樋口 ゆかり（京都橘大学 国際英語学部 国際英語学科 講師）

・科学は面白い！～子ども向け理科実験を通して伝えたいこと～

講師：高尾 郁子（京都薬科大学 薬学教育系 学生実習支援センター 助教）



第3回「いざという時に備えるためのやくたちばなし」

日 時：2023年10月14日（土）

参加者：76名（対面36名・オンライン40名）

・元気なシニアライフのために。フレイル予防を始めましょう

講師：白岩 加代子（京都橘大学 健康科学部 理学療法学科 准教授）

・高齢者に対する予防救急～家の中には危険がいっぱい！未然に防ぐためには…～

講師：今西 孝至（京都薬科大学 臨床薬学教育研究センター 講師）



第4回「健康に生きるためのやくたちばなし」

日 時：2023年11月11日（土）

参加者：75名（対面37名・オンライン38名）

・薬が効かない感染症!?～今私たちにできること～

講師：藤原 麻有（京都橘大学 健康科学部 臨床検査学科 講師）

・生命や健康を司る金属元素の働き～健やかな人生を送るために～

講師：安井 裕之（京都薬科大学 臨床薬学教育研究センター 教授）



3年にわたり実施してきました「京のやくたちばなし～健康で豊かに暮らすコツ～」も最終年度を迎えました。

今年度も多くの受講者に参加いただき、参加満足度については5段階の評価で「5」または「4」を回答した方が8割以上の高い評価を受けました。

また、「大学を身近に感じるか」の質問に対しては、全4回平均で76%の方が「とても感じる」「やや感じる」と回答され、両大学の親近感の向上のきっかけとなりました。

多くの方が「次回の実施を希望する」とアンケートに回答いただき、うれしい限りです。

本講座はこれで終了となりますが、これを機に今後も両大学で共同公開講座を実施できるよう引き続き交流を深めてまいります。

【「区民に身近な大学へ」プロジェクト】京都薬科大学との連携事業

大学の垣根を越えたチーム医療教育

京都橘大学・京都薬科大学による合同多職種連携教育を実施

看護学科 4 回生 + 理学療法学科 4 回生 + 作業療法学科 4 回生
× 京都薬科大学 5 回生

概要

11月9日（木）、京都薬科大学（京都市山科区）で、多職種連携教育（IPE：Interprofessional Education）を実施しました。これは、多様化する患者対応のためにチーム医療を推進できる人材育成を目的として行われ、本学からは看護学科、理学療法学科、作業療法学科の学生が、京都薬科大学からは薬学部の学生が参加しました。当日は、看護師・理学療法士・作業療法士・薬剤師の4つの立場からシナリオ事例に沿って、患者さまや患者さまを取り巻く環境についての状況把握や介入の仕方について議論をしました。第1部では、学科ごとのグループで、それぞれの職種でどのように患者さまの状況をとらえ、向き合うかを議論しました。第2部では、学科混合のグループで各職種の観点の違いや、介入できる点・介入してほしい点などを共有し、具体的にどのように協働できるか議論を深めました。最後に合同でグループごとに意見をまとめ、発表をしました。

IPEの目的は、異なる医療教育を受けている学生が、垣根を越えて学び・話し合うことを通じて、それぞれの職種の強みや弱みを知り、チーム医療に貢献することです。この取り組みは2016年度に本学看護学部と京都薬科大学薬学部の間で開始し、今年度で8回目となります。参加した学生たちは、各職種における観点の違いに理解を深め合いながら、何が患者さまにとってより良いのかと議論をしたり、専門的な用語や見解に質問し合ったりする様子がみられ、活発な取り組みとなりました。

<プログラムの詳細>

■当日のスケジュール

時間	内容
12:30	受付開始
12:45～12:55	ガイダンス、事前アンケート回収
13:00～13:50	【1部】同学科SGD※（50分）
13:50～14:00	移動・休憩
14:00～14:20	グループ発表（1G各3分）
14:20～14:30	移動・休憩
14:30～16:00	【2部】学科混成SGD（90分）
16:00～16:10	移動・休憩
16:10～17:00	グループ発表（1G各5分・5分質疑）
17:00～17:30	講評、事後アンケート記入

※ SGD：Small Group Discussion



Ⅱ 地域連携活動



■ 地域連携活動

大学の研究にふれてみよう

たちばなサイエンスデー 2023

14 学科 + 学生有志 + 5 学生団体

活動報告

2023年7月29日（土）、京都橋大学にて『たちばなサイエンスデー2023』を開催しました。本イベントでは「大学の研究にふれてみよう」をテーマに、14学科から15ブース、4つの学生団体（まちづくり研究会・救急救命サークルTURF・大学祭実行委員会・げんKids★応援隊）が4ブースを設置し、小学1年生から6年生を対象にブースごとに趣向を凝らした内容でさまざまな体験やものづくりを実施しました。また、学生団体の「子どもサポート研究会」は、放課後等デイサービスの児童のサポートを行いました。

各ブースでは、担当教員と学生が運営にあたり、児童は学生たちとコミュニケーションをとりながらさまざまな取り組みを行いました。参加した児童は一日を通してとても楽しそうに過ごしており、保護者からも「子どもが楽しめて良かった。」「来年もぜひ参加したい。」といった声を多くいただきました。

また、ブースの運営に携わった教員や学生にとっても、児童や保護者から気づきを得ることができ、地域への貢献とともに学生の学びにもつながるイベントとなりました。

参加児童人数：のべ621名

出展内容一覧（学科ブース）

出展内容	担当者
Let's enjoy English!! カードゲームで遊ぼう	大澤 康二 (国際英語学部国際英語学科 助教) Meg Ellis (国際英語学部国際英語学科 専任講師)
お話玉手箱 絵本の世界にとびこもう!	辻本 千鶴 (文学部日本語日本文学科 教授)
きみだけのこん虫図鑑をつくろう!	後藤 敦史 (文学部歴史学科 准教授)
ドローンで空中から遺跡を調査しよう!	南 健太郎 (文学部歴史遺産学科 准教授)
甲骨文字でハンコやキーホルダーを作ろう!	池田 修 (発達教育学部児童教育学科 教授)
モノの見え方のふしぎ ~こころで変わる見え方・感じ方~	坂本 敏郎 (総合心理学部総合心理学科 教授)
あなたはやりくり上手? カレーの材料を集めよう!	矢口 満 (経済学部経済学科 教授)
実は知らない!? 本当の足の大きさをはかってみよう!	大野 宏之 (経営学部経営学科 教授)
ドローン・ターゲット・チャレンジ!! ~目標に着陸せよ~	平石 拓 (工学部情報工学科 専任講師)
あなたも小さな建築家! すてきな家を設計しよう	平井 良祐 (工学部建築デザイン学科 助教)
あなたもナース!? 聴診器を使って身体を覗いてみよう	中橋 苗代 (看護学部看護学科 准教授)
ほねほねパズルを組み立ててみよう!	甲斐 義浩 (健康科学部理学療法学科 准教授)
指先王になる! ~こころとからだについて学んでみよう~	中井 秀昭 (健康科学部作業療法学科 助教)
身近なモノを科学で体験しよう	大澤 幸希光 (健康科学部臨床検査学科 専任講師)
ハカセになって、からだの不思議をしらべよう	所司 睦文 (健康科学部臨床検査学科 教授)



■ 地域連携活動

世代を超えた地域コミュニティ創造の場

たちばなこども食堂

たちばなこども食堂実行委員会 + 6 学生団体×イオンタウン山科榎辻、山科青少年活動センター、子どもお弁当食堂サンフラワー、京都市やましな学園

取り組みの目的

『たちばなこども食堂』は、食を通じて対話を重ね、様々な世代が交流できる地域拠点となることを目的に、2022年度に本学キャンパス内で初めて開催しました。2023年度は学生団体（まちづくり研究会、ME-ME、げんKids★応援隊、救急救命サークルTURF、えしかるず橋、子どもサポート研究会）と協力しながら9月と12月の2回開催しました。2023年12月に開催した『たちばなこども食堂』では、山科区で活動している多くの子ども食堂や地域の福祉に貢献している団体の活動を参加者に知ってもらうことで、地域の方々に必要な支援が行き届くように「山科青少年活動センター」「子どもお弁当食堂サンフラワー」「京都市やましな学園」と連携して開催しました。

活動報告

9月は、より幅広い年齢層の方に参加してほしいという思いでイオンタウン山科榎辻と協力し、同館を会場としてイベント型「たちばなこども食堂」を開催しました。イオンタウン山科榎辻2階の特設会場で、学生が体験イベントを行い、参加者にこども食堂メニューの購入券を配付しました。その購入券をイオンタウン内の各協力店舗に持っていくと、特別に販売する"こども食堂メニュー"を購入できる仕組みです。当日は205名（体験イベント参加者延べ人数）の子どもや保護者の方にご参加いただきました。

参加者からは、「お姉さん、お兄さん達が子どもに積極的に話しかけて、楽しませようとしてくれていたのが伝わってきました。子どもも大人も楽しめました。」「大学生と地域の住民が交流できる良い機会だと思う。」というような声をいただきました。

12月は本学で開催し、1個200円のお弁当を167食販売しました。お弁当販売のほかにも、「京都市やましな学園」によるアイスクリームの販売、本学と京都薬科大学との共同学生団体「ME-ME（ミーム）」によるわたがしブースや、京焼・清水焼の絵付け体験やオリジナルエコバッグ作り体験など、学生団体による様々な企画も催されました。当日は発達教育学部児童教育学科の学生団体「げんKids★応援隊」による「クリスマス企画」も同時開催され、参加した地域の子どもたちと学生が楽しく交流できるイベントとなりました。

会場には、山科青少年活動センターのご協力のもと、山科区の子ども食堂を紹介するブースを設置し、「やましなの子ども食堂MAP」やチラシを配布しました。このブースは実際に山科区で活動されている「子どもお弁当食堂サンフラワー」にご担当いただきました。

参加者からは「お弁当の量もちょうど良く、子どもたちとゆっくり食べられました。」「山科区の子ども食堂も今後は利用してみたい。」と大変好評をいただきました。

今後も山科地域の子ども食堂と連携しながら、それぞれの想いを広く周知し必要な支援が行き届くように、また、地域の活性化に貢献できるよう活動を展開していきます。



■ 地域連携活動

日常的な買い物をスムーズに

移動販売車の受け入れスタート

京都橘大学×イオンフードスタイル山科柳辻店（株式会社ダイエー）

取り組みの目的

2023年7月6日（木）より、京都橘大学キャンパス内にて、株式会社ダイエーが運営するイオンフードスタイル山科柳辻店の移動販売車の受け入れを開始しました。

本学の所在する大宅山田地区においては、大型のスーパーマーケットまでの距離が500メートルを超え、また坂道の上下りを伴うところから、高齢者を中心として日常的な買物が困難な状況となっています。また、大学近隣には老人ホーム等があり、ここに暮らす方々の買物も困難な状況にあり、山科区社会福祉協議会にも、大学近隣住民から買物支援の要望が寄せられていました。

こうした状況のなかで、イオンフードスタイル山科柳辻店、山科区社会福祉協議会と連携し、定期的に本学キャンパスにイオンフードスタイル山科柳辻店による移動販売車を受け入れ、日常の買い物に不便を感じている地域の方々の支援をしようと実施しています。

活動報告

移動販売は大学の窓口閉鎖期間を除き、毎週木曜日11:20～12:20に東門ロータリーに販売車2台が設置され、野菜、果物、お魚、お肉、牛乳、豆腐、パン、加工食品、お米、お水、調味料、日用品など約800点の商品が並びます。開始時間になると近隣住民の方々が訪れ、商品を手に取り店員さんと会話するなど、楽しんで買い物をする様子が見られました。これからも地域の方々の力になれるよう活動を続けていきたいと考えています。



■ 地域連携活動

山科の地域資源を生かしたあかりイベント

「七夕陶灯路 2023」実施

まちづくり研究会

活動の概要

今年も山科の風情あふれる夜を照らし出す「七夕陶灯路 2023」が、京都橘大学キャンパスにて開催され、多くの地域住民が美しい灯りと共に夏の宵を楽しみました。

山科地域の伝統的工芸品「京焼・清水焼」が創り出す灯りが、大学キャンパスを幻想的な空間に変え、参加者たちはその美しさに感嘆の声を上げていました。今年は「夏の宵」をテーマに夕暮れから深夜まで、山科の夜空や夏の宵を清水焼などで表現しています。今年は特に、はじめて学内のバスロータリー前を使い、アカデミックリンクスの大階段の大きな窓から陶灯路の灯りが見えるように工夫しました。

「七夕陶灯路 2023」のプログラム

プログラムには、清水焼の絵付けワークショップ、クイズラリー、箏曲部と吹奏楽部による音楽演奏などが盛り込まれ、参加者たちは楽しみながら地域の伝統工芸に触れました。

ワークショップでは、京焼・清水焼の絵付け体験を実施し、参加者には職人が作った京焼・清水焼の無地の箸置きを選び、専用のペンで自由に絵を描いてもらいました。この体験を通じて、参加者にとって伝統的工芸品である京焼・清水焼の繊細な技術に触れ、自らのアートを創り出す楽しさを感じる機会となりました。

クイズラリーでは、各エリアに清水焼と学生が絵付けした陶器を見分けるクイズブースを設け、普段接することのない清水焼をじっくりと観察する機会をつくりました。クイズの正解者には、山科地域ならではの缶バッジやシールなどがプレゼントされました。また、クイズを作るにあたって、学生と清水焼の職人が協力し、清水焼の理解を深める交流の機会となりました。

途中の雨にもかかわらず、300人以上の来場者がイベントに参加し、学生と地域住民が一緒になって山科地域を盛り上げるイベントとなりました。また、地域の魅力を再発見する場として、七夕陶灯路を通して、地域の発展について考えるきっかけとなりました。



七夕と織姫が天の川を渡って
年に一度出会えるとされている七夕
そんな特別な夜に京都橘大学で
素敵なひとときを過ごしませんか

今年のテーマは「夏の宵」
花山天文台から見える夕暮れから
夜中まで輝く山科の夜空の様子や
夏の宵の様子を陶灯路で
表現しています

7月7日(金) 18:00 - 20:00
開催場所：京都橘大学構内

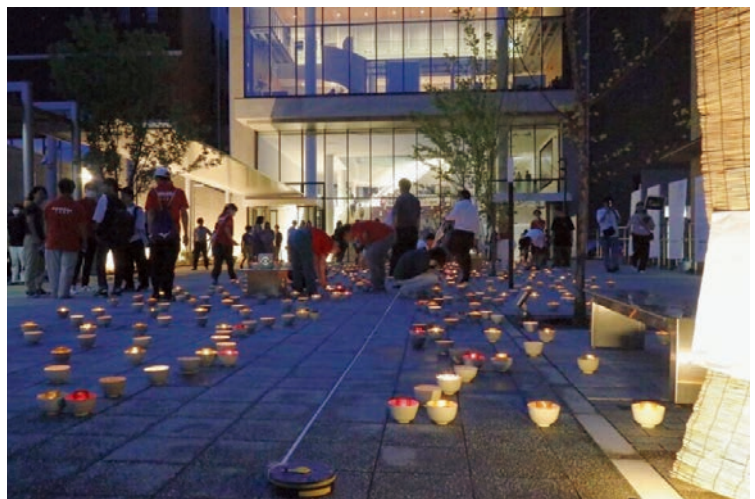
※当日小雨決行。
雨天の場合、7月14日(金)に延期
※学内者は申込み不要、学外の方は申込みが必要です。→
なお、当日受付も行なっています。

お申込みは
こちらから

当日ライブ配信は
こちらから

QRコード：Entry Form, Instagram, YouTube

京都橘大学地域連携センターまちづくり研究会主催



■ 地域連携活動

団地に住む大学生が住民と交流する

醍醐中山団地「たちばな納涼祭」の実施

醍醐中山団地 × 団地で暮らす学生

概要

本学では、2015年から地域貢献の一環として京都市営醍醐中山団地と連携した取り組みを行っています。京都市から棟の1階部分を借り受け、「地域連携センター醍醐中山団地分室」を開設し、ここを拠点として、学生や教職員が団地内の高齢者支援や子育て世帯との交流活動を定期的実施しています。また、学生のためのシェアルームも併設し、入居した学生が団地の一員として日常的に交流することで、世代間の繋がり構築を推進しています。

2023年度の実績

2020年度以降は、新型コロナウイルスの影響で十分な活動ができない状況でしたが、今年度から醍醐中山団地と団地に住む大学生が交流するイベントを開催することができるようになり、8月には納涼祭を実施しました。

納涼祭は、醍醐中山団地に住む本学の学生が主催し、地域住民との交流を促進するために開催され、野菜の販売やスイカ割、水風船遊び、レコード喫茶が実施されました。これらの企画は、事前に地域住民へのヒアリングを行ったときに、「買い物に行きたいが、最寄りのスーパーまでが遠い」「団地内に子どもが遊べる環境が不足している」「コロナの影響で高齢者同士の交流が減った」といった課題が挙げられ、これらのニーズに応えるべく実施されました。

当日は、約30名の住民が参加し、開催場所の公民館が活気づきました。参加者からは「コロナ禍でできていなかった大学生との交流ができて嬉しい」「今後も継続的に連携していきたい」といった意見が多く寄せられました。このイベントを通じて、地域住民と大学生が、共に楽しむ場が生まれ、地域コミュニティの活性化と、住民のニーズへの対応が図られました。これからの醍醐中山団地との連携ではコロナ禍で制限され、薄れていた地域との関係性を取り戻すために、より実践的なプロジェクトを進めていく必要があります。

今後も、地域住民との交流を継続し、情報の共有や課題解決に向けたプロジェクトの提案を行うなど、柔軟性のある方法を模索し、連携を深めながら醍醐中山団地の発展を地域住民の方とともに進めていきます。



■ 地域連携活動

域学連携による文化財保護と人材育成

先端調査技術を導入した滋賀県高島市南畑古墳群の発掘調査

文学部 歴史遺産学科 × 高島市

経緯と目的

高島市は、2021年に認定された「高島市文化財保存活用地域計画」に基づき、文化財を守り、次世代に伝える取り組みを行っています。この目的実現には文化財を深く理解し、その魅力を発信すること、なによりそれを担う人材育成が欠かせません。

高島市教育委員会と京都橘大学は、域学連携として遺跡保護と古代史解明による地域の魅力創生を目指してきました。協働によって、いま日本各地で求められている文化財を保護・活用できる専門人材の育成を教育の一環として行っています。

調査内容と成果

歴史遺産学科では歴史遺産調査実習の一環として、2022年春より高島市新旭町安井川に所在する南畑古墳群発掘調査を実施してきました。2023年度の調査では南畑3号墳の埋葬施設、墳丘の調査を行いました。

これまでの成果として、南畑古墳群が6世紀中葉より累代的な古墳築造を行っていること、個々の古墳が系統の異なる埋葬施設を有していること、墳丘構築過程に差異が認められることなどが明らかになりました。高島平野は「謎の大王」とも言われる継体大王の生誕地として古代史上有名であり、調査によって大王没後も支援勢力が維持されていた実態が判明しました。

2022年度までの調査成果は、2023年5月に教員と高島市文化財担当者が日本考古学協会第89回総会で報告したことに加え、2023年度の成果は、9月に共同通信や京都新聞をはじめ報道各社で報じられました。10月1日には現地説明会を行い、約50名の参加者がありました。

学生が得た学び

現在、発掘現場ではSfM/MVS技術を用いて遺構や遺物等を三次元モデルとして記録する手法が導入されてきています。歴史遺産学科では、大学の2022年度教育開発支援助成制度によって、この導入に向けた環境整備を進めてきました。調査では学生がこの写真測量を自ら実施しました。この成果として、受講生・上原弦登さん（2回生）の「今後、文化財の調査の中で使われる技術なので、学んだことを生かしたい」というコメントが京都新聞（2023年9月28日付）に掲載されました。先端技術を駆使できる専門人材の育成によって、今後も地域に貢献したいと考えています。



調査の風景



南畑1号墳の三次元測量図

■ 地域連携活動

地域の多文化共生社会に向けて

山科警察署員向けの英語講座

国際英語学部 国際英語学科×山科警察署

概要及び取組の狙い

国際英語学部は、2017年以来、山科警察署員を対象とした英語講座を実施しています。新型コロナウイルス感染症に起因する規制も緩和され、京都・滋賀を訪れる国際観光客数が急速に増加する中で、京都駅からのアクセスも良く、多くの観光スポットを有する山科地域に所在する同署においては、様々な場面で、英語を用いた対応が求められています。滞在中のトラブルは、遺失物・事故・盗難など多岐にわたり、その状況に応じた、迅速かつ適切な対応が必要となります。2023年度の講座では、実際に対応頻度の多い場面を想定した内容とすることで、実践的な英語スキルの習得に寄与することを目的として実施しました。

また、本学部の3回生（有志2名/回）が、すべての回の講座でアシスタントを務め、ディスカッションの活性化や講座のスムーズな進行に貢献しました。1年間の留学を終えた3回生にとっては、自らの英語力を運用する能力や、コミュニケーションスキル等の向上のためのアウトプットの機会として、意義の高い活動となりました。

2023年度は、2024年1月から3月までの期間に、全4回（100分/回）実施しました。各回には、およそ15名の方々にご参加いただきました。

活動の成果

本講座は、地理教示（道案内）、遺失物など、実際に頻発しているトラブルやアクシデントに関わるテーマに特化し、毎回異なるテーマを設定しました。複数のシチュエーションでの会話を、ペアワークやロールプレイで行うなど、参加型で行う演習を中心に構成しました。スムーズな声かけや会話中におけるポイントや注意点などについても解説を行い、受講者が実際に活用することを想定した内容に重点を置いたことで、受講者からは、「場面ごとの適切な英語表現を知ることができ、とても有意義だった」「日常では、英語を話す機会があまりないので、講座の中で話す練習をできたことが良かった」などの好評を得ました。

アシスタントの学生は、教員との事前打ち合わせにも積極的に参加し、淀みなく英語フレーズを話すための準備を入念に行った上で、当日に臨みました。アシスタントとしての自覚をもって講座の運営に携わることで、英語でのコミュニケーションを楽しみながらも、地域社会の一員として、地域課題にどのように向き合うかということを思考する貴重な学びの機会となりました。



学生によるサポートの様子



講座の様子

■ 地域連携活動

地域との絆を深める企画・運営

子どもの安全を十分に配慮し、協同しながら取り組む力の育成

発達教育学部 児童教育学科 げん Kids ★応援隊

地域に密着したボランティア活動の目的

げんKids★応援隊は、地域の子どもや保護者に密着した親しみやすいボランティア団体になることをめざして、学内サークルや地域の団体と協同しながら活動を続けています。

2023 年度の実績

今年度はコロナの規制の緩和もあり、今まで制限されてきた活動が広く展開できるようになりました。その結果、大きな企画にチャレンジすることができました。

5月には、救急救命サークルTURFとの合同企画の巨大遊びを実施しました。巨大遊びとして設定したのは、巨大すごろく、巨大輪投げ、巨大カードめくり、風船キャッチ、神経衰弱の5つでした。中央体育館大アリーナを5つのブースに分けて、地域の子どもたちに思いっきり体を動かして楽しく遊んでもらいました。保護者の参加もあって盛り上がりました。

7月には、勤修小学校の保護者組織「勤修おやじの会」との共催でデイキャンプに取り組みました。5・6年生の飯ごう炊飯を補助し、キャンプファイヤーを行いました。新型コロナウイルス感染拡大で中止になっていた行事が完全復活したので、参加した親子ともども楽しい時間を過ごすことができました。

9月には勤修ふれあいの集いに参加し、屋台の射的や「ふわふわエア遊具」のブースを担当しました。地域の夏祭りということもあり、子どもだけでなく、保護者の方や高齢者の方とも関わることができました。

12月には、恒例のクリスマス企画を実施しました。雪だるま、クリスマスリース、クリスマスカード、サンタの帽子の製作や、ビンゴ大会を開催しました。同時企画として「たちばなこども食堂」も行っていたので、約200人の参加者を集めることができました。

活動によって得られた学生たちの成果

親と子どもたちが楽しく過ごせることを最優先にしてアイデアを出し合い、学内サークルや地域の団体と協同して取り組む姿勢はすでに身につけています。加えて、新型コロナウイルス感染拡大でできなかった多人数の企画が再開したことから、今年度は子どもたちの安全を十分に配慮することが求められていました。その結果、安全を十分に配慮して企画・運営する力が育ってきているように感じます。今後も引き続き、伸ばして欲しい力です。



勤修小学校のデイキャンプ



クリスマス企画

■ 地域連携活動

大学生による若者のための自死予防対策

京都府自死対策カレッジ会議に参加

総合心理学部 総合心理学科 × 京都府

活動の概要

「京都府自死対策カレッジ会議」に参加しました。この会議は、若者の自殺対策を目的として2021年度に設置された京都府の事業です。設置の主旨は、2021年3月に策定された第2次京都府自殺対策推進計画において「若者の自殺対策」が重点事項として位置づけられたことから、「若者の自殺対策が求められる中、特に大学生が自殺の現状や自殺につながるような困難から自分や周りの人を守るための対策を学び、自死に対する意識を高め、自殺予防等に主体的に活動するため本会議を設置する」とされています。府内5大学（京都ノートルダム女子大学・京都府立大学・京都文教大学・龍谷大学・京都橘大学）の学生・教職員等により構成されています。

取り組みの経緯や狙い

京都橘大学の学生と教員は2022年度から継続して参加しています。自死の現状や対策について学び、学んだことを生かしてイベント企画等の啓発活動を行ってきました。

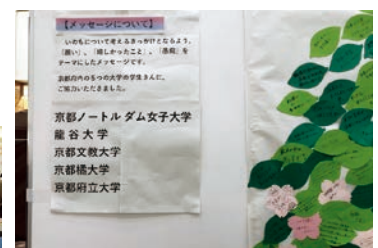
2023年度の「京都いのちの日メッセージ展」（2024年3月1日イオンモール京都にて開催）では、「自分を知るブース」「癒しブース」「チラシ・リーフレット」「メッセージボード」が提案され、各大学から希望する班が集まった学生が協力して企画を考えました。学生が主体となって企画について考えることに加えて、他大学の学生との交流や意見交換が図れることもカレッジ会議の良いところだと思います。

2023年度の活動実績

2023年度は、カレッジ会議が9回、学習会が3回開催されました。また、京都府精神保健福祉総合センターの見学会も開催されました。

メンバー全員が一堂に会することは難しいので、会場とオンラインでのハイブリッド開催でカレッジ会議を行いました。夜間の会議にも関わらず大勢が参加し、毎回充実した勉強会やイベントについての話し合いが行われ、司会進行も学生が担当しました。冒頭の自己紹介では「今日のひとこと」と例えば「今日の夕ご飯または食べたいものはなに?」「推しは?」などが提案され、和やかな雰囲気で開催を行うことができました。

扱っているテーマは深刻な内容ですので、京都府の関係者や各大学の教職員は学生に負荷がかかりすぎないように配慮しながら、学生が若者をはじめとした多くの方々に自死予防を啓発することに尽力していることをサポートしました。本学の学生は、「自分を知るブース」「チラシ・リーフレット」班に参加し、「チラシ・リーフレット」班のリーダーを務め、自死予防を啓発するチラシを作成しました。また、大学内でたくさんのメッセージを収集しました。



「京都いのちの日イベント」の様子（2023年3月1日）

■ 地域連携活動

リーダーボランティア参加を通して伝統行事を3Rから支える

祇園祭ごみゼロボランティア大作戦

経済学部 経済学科 2回生「プロジェクトマネジメントⅡ」

概要

祇園祭宵々山宵山期間中には毎年約60トンのゴミが生じます。そこで夜店・屋台へのリユース食器貸出活動を促進するとともに、エコステーションを設置し、ゴミ分別作業などを実施するのが祇園祭ごみゼロ大作戦です。当日ボランティア2,000名の活動を支える「リーダーボランティア」（募集定員100名）に2回生24名が参加しました。

取り組みの経緯や狙い

2016年から毎年参加していた金武ゼミ3・4回生（旧都市環境デザイン学科）有志の取り組みを継承して、経済学部・経営学部「プロジェクトマネジメントⅡ」fクラス学生が2023年度からリーダーボランティアとして参加しました。4回の座学研修と実践研修（野外音楽フェスティバル）を経て、2023年7月15日～16日（10時から22時）に2,000名の当日ボランティアとともに活動できました。地元住民や企業ボランティアと連携しながら、身近な環境問題と観光公害の現場体験を通して、課題を発見し即時に解決する力を養うことを目指しました。

取り組みの成果

学生自身の振り返り文章から活動成果をまとめます。第一の成果は数時間前に出会ったばかりの当日ボランティアの皆さんと協力しながらエコステーションを運営することによって、学生自身がキャンパス生活では得られないマネジメント能力を発揮した点です。続いて、何事にも積極的に行動しないと祇園祭のゴミ廃棄状況が悪化しかねないので、観光客へのゴミ分別の声掛けやゴミ袋の取り替え作業、混雑を緩和し円滑な通行を促す呼びかけなど、臨機応変で自発的な取り組みができた点が第二の成果と言えます。予定調和的な授業内プロジェクトと異なって、実際の現場で即時的な状況判断を求められたために、どちらの成果も失敗経験も含めて自ら考え自ら動く臨床の知に結びついたのではないのでしょうか。

最も大きな成果は、国内最大規模の伝統行事である祇園祭をボランティアとして支えた経験自体が単に普段の生活では得られない達成感や充実感を生み出しただけでなく、社会に役立っている自分自身の姿を実感し自信を持てた点です。「このボランティアを通じて今まで持ち合わせなかった考え方や経験を得られました。私たちの前を通る時に観光客が『ありがとう』と言ってくれたり、募金をしてくれた人もいました。喜んでくれた事が分かると、もっと色んな人の役に立ちたいと行動する事ができました。」（経済学部2回生Nくん）



■ 地域連携活動

世代間交流プロジェクト

『15Fies (いちごフェス)』の実施

現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科 木下達文ゼミ

共同研究プロジェクトの概要

京都橋大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科の木下達文ゼミでは、卒業研究とは別に共同研究プロジェクトを実施しており、座学と実践学とをバランス良く学習させています。今回のテーマは、いくつかの事業企画の中から「交流」というテーマが選定され、とくに世代間の交流に焦点を定めました。また、サブテーマとして「環境問題」が選ばれ、有機栽培についての研究を行いました。そうしたものづくりの現場を調査した上で、様々な世代で交流ができるプログラムの研究開発を行い、学内において交流イベントを実施するとともに、有機栽培に関する冊子を制作し、普及に努めました。

取り組みの経緯や狙い

本共同研究プロジェクトの狙いは、企画から制作までの研究実践活動を通じて、とくに学生に足りない社会人基礎力を向上させるとともに、実社会で役立つ基本的なビジネスの知識やノウハウを体験的に学ばせることです。学生が自らテーマを決め実施する方法をとっており、ゼロベースから企画・研究・制作を行うことから「クリエイティブ・ラーニング」と称しています。また、最終的な成果は、一般でも通用するレベルのクオリティを目指しており、社会的な評価を得られることも目標としています。

具体的な成果と実績

木下ゼミでは、所属する4回生の学生15名が、「世代間交流プロジェクト」を立ち上げ、2022年4月から活動をしてきました。このプロジェクトの集大成として、2023年9月30日(土)と10月14日(土)に京都橋大学にて、世代間交流イベント『15Fies (いちごフェス)』*を開催しました。この年代の学生は、新型コロナウイルスの影響により入学式ができず、1回生前期はオンライン授業、課外活動の自粛など感染拡大防止のため制限のある大学生活を送ってきました。2023年の5月以降行動制限が緩和されたため、異なる世代の人々と交流し、世代を超えた繋がりや相互理解を深めることを目的として本企画を実施しました。当日は、山科老人クラブ連合会と地域の児童館と連携し、高齢者や子どもたちが、学生が考案した世代語ゲーム・野菜ゲームとともに、手作りオリジナル開発したペーパーモルックで交流を深めました。また、サブテーマで掲げた「環境」に関連して、資源の有効利用や食の安全についても探求しました。有機栽培について学んだ内容をまとめた冊子を配布し、有機米で作ったおにぎりを提供しました。このプログラムは、“世代間交流を行う上でのモデル事業”となることを目指して設計しており、最終的にプログラムのマニュアルと有機栽培の冊子を木下研究室のHP上で公開しました。

*15Fies (いちごフェス) : 「15」は、ゼミ生が15人いることと、一期一会の「一期」にかけ、一度きりの出会いを大切にしたいという思いから命名。また、「Fies」のFはfood (食)、ielはIntergenerational exchange (世代間交流)、sはsports (スポーツ) を意味し、イベントなどを意味するFes (フェス) とかけています。



世代間交流の様子



世代語ゲームの状況



ペーパーモルックの実施



制作した有機栽培の冊子

■ 地域連携活動

経営学部・経済学部合同 PBL

コープしがの商品から考える地域のくらしと産業

経営学部 経営学科・経済学部 経済学科×コープしが

京都橋大学×コープしが共同プロジェクトの概要

近年、食品の生産や流通、消費のすべてのプロセスにおいて持続可能性が求められており、SDG'sやエシカル消費を意識したサプライチェーンの構築が必要とされています。本プロジェクトの連携先であるコープしがは、びわ湖の「石けん運動」に代表される環境問題に対し、生協としていち早く取り組んできた歴史をもち、現在においてもびわ湖環境を守るため地域の農業生産者などと協力しながら「環境こだわり農産物」の取り扱いをはじめ様々な取り組みを事業として実施しています。

本プロジェクトに参加した経営学部・経済学部の3年生20名は、そうした事業を展開するコープしがへのフィールドワークを通して、生活者や消費者の視点から、私たちが普段、消費している商品が持続可能な地域社会の実現とどのように関わることかということについて実践的に学びました。

フィールドワークを通じた学びの狙い

本プロジェクトは、コープしが及びその取引先企業の仕事現場やそこで働く人、コープしが利用者の生の声を聴くことを通じて、以下の二つの点を受講生に考えてもらうことを目的として進めました。

- ①どのような人々や組織、企業などが関わりながら商品のサプライチェーンが形成されているのかを理解すること。
- ②コープしがの事業や環境に配慮したコープ商品は若い世代にとってどのような価値や魅力を持つのか、そうした価値が若い世代に共感されるためにはどのようなことが必要なのかを考えること。

プロジェクトの成果と来年度に向けて

プロジェクトの成果として、学生たちは「コープしがの事業や商品の魅力を若い世代に伝える」というテーマで3分程度のPR動画を制作し、コープしがの役員に対してプレゼンテーションをしました。動画の内容は、生産者の商品に対する思いやこだわりを商品のストーリーとして伝えようとしているものや、組合員目線の店舗づくりや徹底した品質管理の様子などコープしがの事業を魅力として伝えるものでした。それを見たコープしがの役員の方々からは、日頃の仕事において当たり前だと感じていることが、学生から魅力として感じてもらっている点を発見することにつながり、自分たちの仕事を改めて見直すよい機会となったと講評を頂きました。

2023年度の本プロジェクトを踏まえ、2024年度は経営学部・下門ゼミ3年生との合同プロジェクトとして、コープしがオリジナル商品の開発に取り組む計画です。



コープしが もりやま店でのFWの様子



コープしが 白石理事長の講演の様子



最終成果のPR動画の報告会

■ 地域連携活動

イオンフードスタイル山科榊辻店との地域連携活動、調査・研究を「売上向上」に生かす

ベーカリー事業売上日本一プロジェクト

経営学部 経営学科 下門ゼミ・桑ゼミ×イオンフードスタイル山科榊辻店

概要と取り組みの狙い

山科区のイオンフードスタイル山科榊辻店と、本学経営学科の下門ゼミ・桑ゼミそれぞれの3回生が協力して「ベーカリー事業売上日本一プロジェクト」を実施しました。この取り組みの狙いは、下門ゼミのマーケティングと桑ゼミのデータサイエンスの専門性を生かし、問題の発見・解決に向けた提案を行い、企業の実際の経営活動に応用できる力を学生に養うことです。企業からは売上データや調査活動のサポートが提供され、学生たちはこれを活用して調査・データ解析を通じて多岐にわたるスキルを磨きました。

2023年度の成果

2024年1月16日、啓成館にて下門ゼミ1グループと桑ゼミ2グループは、企業への最終提案を行いました。下門ゼミの学生たちは、POPの作成、商品陳列・販売方法の改善、新商品の投入によって、消費者の購買意欲を刺激する提案をしました。一方で、桑ゼミの1グループは店舗提供の売上データと学生が収集した商品補充データを統合し、ABC分析に基づいた製造・販売方法の提案を行いました。もう一つの桑ゼミグループは、商品の売上のばらつきに着目し、店舗のイベント情報を考慮した在庫管理システムを開発しました。

本プロジェクトの意義

最終報告会では、山科榊辻店の店長に、「今回のプロジェクトを通じて、売手発想から買手発想への転換が重要であることに気づかされました。これは終わりではなく、むしろ新たな始まりであると認識しています。従業員と協力し、より多くのお客様に満足いただけるよう取り組んでいく覚悟です」とコメントいただきました。同時に、学生たちも、「プロジェクトへの参加を通じて、実際のデータを活用できたことが大きな収穫でした。架空の整理されたデータではなく、実際の情報を扱うことで、データ解釈や活用方法について多くの知見を得ることができました。プロジェクトを通して、これまでの常識や自身の考えが変わる瞬間があり、新たな視点を身につけることができました。これらの学びは、大学生活だけでなく、社会に出た際にも生かしていきたいと思っています。」などと述べ、数々の学びと洞察が得られました。今後もこのようなプロジェクトを通して、学生たちが実践的なスキルを磨き、現実の課題に対処できる能力を身につけていくことが、大学教育の一環として重要であると考えています。



■ 地域連携活動

近江日野商人の遺産を現代に生かす

「近江日野商人島崎の家」 活用の試み

工学部 建築デザイン学科 鈴木あるのゼミ

歴史的商家の保存活用提案

滋賀県日野町にある一般社団法人「近江日野商人島崎の家」では、空き家となった島崎邸を所有・管理しながら有効活用の方角を模索しています。そのような中、大学生の視点から空き家の有効活用計画を提案し、行政の方々や地域のリーダーの皆様と意見交換する発表会を開催していただきました。

価値ある建築を学び活用するために

中森孟夫先生の生誕の地として本学とも縁のある滋賀県蒲生郡日野町には、歴史的にも建築的にも非常に価値の高い日野商人邸宅が残っています。1970年代以降その解体が急激に進む中、民間有志の組織である日野まちなみ保全会が、残存する日野商家の維持保全のために懸命の努力を続けてきました。本ゼミではかねてより日野商家の見学会を実施してきたご縁から、島崎の家の活用計画を提案させていただけることになりました。ここでは若者の視点からの新鮮な提案が期待されると同時に、建築の維持管理費用に充てる収入を生み出すための事業計画など、現実を踏まえた検討が求められています。

多様な要望や意見を受けとめる学び

本年度は6月の日野町見学会に始まり、島崎の家の西村代表理事をはじめとする関係者の方々にご講義をいただき、経営面や社会的背景を理解した上で課題に取り組みました。2023年11月26日に島崎の家にて開催した発表会においては、参加した町の方々から忌憚のない厳しいご意見もいただいたものの、「来年以降もこの発表会を続けてほしい」「今後は大学全体との連携に発展させてほしい」という有難いお言葉を頂戴しました。そのため学生にとっては学内の授業では得られない経験となり、実社会の地域コミュニティに触れる大変貴重な機会となりました。



日野のまちなみと島崎の家

学生による発表と意見交換の会

■ 地域連携活動

四条通地下道の活性化を目指す

Art Under the Shijo への作品出展

現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科 河野良平ゼミ

概要

近年、アートを利用したまちづくりが注目されています。文化庁が移転してきた京都市でも文化芸術資源を核としたアートによる地域活性化が推進されています。この「Art Under the Shijo」は、京都市内の大学でアートやデザインを学ぶ学生チーム6組が参加し、2023年12月11日（月）から2024年2月12日（月）まで開催されたアートイベントです。このプロジェクトは、四条通地下道の活性化を目指す、京都市と四条繁栄会商店街振興組合、阪急電鉄株式会社で構成する「四条通地下道活性化推進会議」による取り組みの一環で、四条通地下道の壁や柱にアート作品を展示することで、歩いて楽しめる空間を創出することを目指したものです。

経緯と取組み

この活動は河野ゼミの2回生が例年参加している駅ナカアートの経験者である現代ビジネス学部・都市環境デザイン学科4回生2名が本プロジェクトの開催を知り、改めて卒業制作としてこのプロジェクトに挑戦したいという申し出からスタートしました。パワーポイントでのプレゼン審査を経て選ばれた作品「きらめきをめざして」を実際に制作し、四条通りの12番出口と13番出口の間にある片側約12メートル、高さ約3メートルの地下空間の両側に作品を設置しました。

作品のコンセプトは、空から落ちてきた天使が地下道の壁を剥がしたところ、壁の中から様々なキラキラした物が見つかる、というものです。制作はイメージに合う材料を探し、試作を作って大型化することを検討するところから始めました。キラキラした感じを出すために絵の具やレジンの重ね塗りを行ったり、ジェルやワックスのちぎり方やドライヤーの当て方を工夫したりしました。壁が破れ、崩れた感じを出すためには、スチレンボードを切るだけでは不十分だったので、断面に珪藻土を塗る等、ディテールにこだわっています。地下道は狭く暗いイメージがあったので、地下道と見ていただく方の心をパッと明るく照らせるような作品を目指しました。作品の設置にあたり、地下道壁面の清掃を行ったり、作品の裏側に作品と壁面を接着させる部材を取り付けたりするなど、展示中には知られることのない苦労もありました。

成果と実績

取り組んだ学生は、建築やインテリアといった普段の制作とは異なる経験ができ、改めてモノづくりの楽しさや難しさを実感しました。12月20日（水）には門川大作京都市長が現地を視察し、制作者から作品の説明を聞きながらじっくりアートをご覧になられました。また、作品制作に当たった各大学の学生達にそれぞれ感謝状が手渡されました。



作品制作の様子



地下道での展示風景



市長に作品を解説する学生

■ 地域連携活動

地域住民とともに育てる

地域住民による模擬患者へのフィジカルアセスメント演習

看護学部 看護学科

模擬患者へのフィジカルアセスメント演習の概要

フィジカルアセスメント演習Ⅱは、「対象者の身体の情報収集し、健康状態をアセスメントするための知識・技術・態度について系統的に学び、それらを統合して実践する力を養う」ことを授業のテーマとしています。学生は、授業の中でお互いに看護師役・患者役となって看護技術を実践します。しかし学生同士ではどうしても現実味に欠けるという現状があります。そこで毎年、地域住民の方に模擬患者役を担っていただき、より実践的な演習を行っています。今年度も大学近隣にお住いの60～80歳代の方20名にご協力いただき、12月に模擬患者へのフィジカルアセスメントを実施しました。

演習での効果的な学びのための準備

【模擬患者演習のための事前学習内容】

学生は、模擬患者演習までに、下記の学習を行います。

- 1) 壮年期・老年期の身体的・心理的・社会的特徴について調べる。
- 2) 問診で確認する内容と、そのことをどのように聞くのかについて考え、まとめる。
- 3) バイタルサイン測定、模擬患者に実施する可能性のあるフィジカルイグザミネーション（身体診査）技術、コミュニケーションについて、実際の場面を想定して練習する。

【模擬患者の設定と練習】

演習当日は模擬患者の皆さんに少し早めに集合していただき、担当教員とともに、患者設定の打ち合わせと模擬患者役の練習を行いました。模擬患者の症状は、皆さんが実際に経験した内容を聴き取り、便秘、風邪気味、体の部位（腕、肩、足、腰など）が痛む・動かしにくい、歩きにくい、などとなりました。この時間を設けることによって、模擬患者役の皆さんには、学習目標に沿った演技をしていただけました。

2023年度の成果

演習後に模擬患者の皆さんからいただく、看護技術に関するアドバイスや、「説明がわかりやすかった」、「身だしなみがきちんとしていてよい印象が持てた」といったお褒めの言葉は、確実に、学生のやる気につながっています。また、演習の翌週に設けている振り返りの時間では、学生は、小グループでの情報共有や意見交換を通して、「患者の訴えに応じた看護技術を安全・安楽に実施する」ための課題や対策を明確にすることができました。

このように、模擬患者へのフィジカルアセスメントは、看護を学び始めたばかりの1回生にとって、患者から得た情報をもとにその患者の個性を理解すること、そして学習意欲の向上といった観点から、重要な学習の機会になっています。



■ 地域連携活動

醍醐中山団地の住民を対象に

「看護お助けたい in 醍醐中山団地」の活動

看護学部 看護学科×醍醐中山団地町内連合会

活動の概要

2016年度から実施しているこの取り組みは、看護学部の正課授業「プライマリケア実習」の一環で年に2回開催していましたが、しかし2020年からコロナ禍で中止となっていて2022年度に3年ぶりの再始動となりました。その間に新カリキュラムとなり、3回生の演習「生涯健やか看護学演習」として年1回の開催に変更となりました。内容は変わらず本学看護学部の学生が、京都市営醍醐中山団地の高齢者宅を訪問し、各戸から事前に聞き取った生活上の困りごとを住民と一緒に解決・支援するものです。

地域の住民も喜び学生の学びも得られる看護学実習の在り方

看護の対象となる人々の生活に視点をおくことは、看護を行う上で非常に重要です。しかし、世代間交流が少ない近年の学生は、高齢者の生活をイメージすることが難しく、入院患者への援助を考える時の障害となっています。

そこで、醍醐中山団地の住民の協力を得ながら、高齢者の生活を知る実習を計画し、6月17日（土）に3回生（95名）に実施しました。醍醐中山団地は高齢化に伴い独居高齢者率も高く4階建ての団地にはエレベーターが設置されていないため、粗大ごみの搬出が容易ではありません。その他にも部屋の模様替えや、風呂場や台所回りの掃除など、生活上の様々な困りごとに対して学生の力を活用し解決することで、日常生活の場を観ることができ、日々の生活の話を聞かせてもらえるのではないかと考えました。

学生を受け入れてくださる住民にとっては、日々の生活上の困りごとが解決し、学生にとっては家庭に上がり日常生活を覗けてもらえる貴重な学習となり、互いにメリットがあると考えました。

活動の成果

事前に棟長の方々を通じて実習協力者と作業内容を募り、その作業内容に合わせ学生配置と事前学習を実施しました。協力は昨年度17世帯でしたが、今年度は26世帯とコロナ感染症拡大前の水準に戻ってきました。

学生は依頼された作業内容を糸口に健康・体力・普段の買い物や食事など生活の様々な話を聞くことができました。在宅医療が進むなか、退院を支援するための知識としてとても学びの多い実習となりました。

学生の学びになったのはもちろんのこと、住民は「今日を心待ちにしていました。一人で大きな家具を運んだり配置替えを行うことができなかったので、とても助かりました。大変感謝しています」と話し、参加した学生は「直接困っていることを聞いて良かったです。訪問看護の勉強にもなりました」と話しました。また、醍醐中山団地の会長からは「普段できない作業を手伝っていただき、住民一同とても喜んでます。これから、皆さんが立派な看護師さんになって活躍されることを応援しています」と学生に感謝とエールの言葉をおくりました。



■ 地域連携活動

地域住民の健康づくりに

たちばな健康相談

看護学部 看護学科

地域住民の方々の健康の保持・増進を目指して

看護学部教員が行っている社会貢献事業の一つとして、健康支援事業があります。この事業は、『地域住民のニーズにもとづいた健康相談や生涯学習などの活動を通じて、その方々の健康を支援する』という目標のもとに行っています。

たちばな健康相談

たちばな健康相談は、看護学部の教員と学生が協力しながら実施しています。2023年度は、大学祭と京都市山科区主催の区民祭り「やましな健康フェスタ」にて実施しました。大学祭では、身体計測（身長、体重、体脂肪率）、血圧測定、骨密度測定、血管年齢測定、脳年齢測定、健康相談などを行いました。やましな健康フェスタでは山科中央公園内で、山科区内の地域包括支援センター、地域介護予防推進センターと合同で体力測定ブースを出し、本学は主に、骨密度測定、脳年齢測定を行いました。大学祭には約200名、やましな健康フェスタには約360名の方々が参加され、健康について見つめ直していただく機会となりました。

健康相談に参加された方からは、楽しく健康状態が知れて良かった、スタッフの対応が良かったので安心して参加できた、普段測れないものがあったとおもしろかった、結果を見てこれから食生活を見直したいなど、参加への満足やスタッフの対応の良さ、今後の健康への抱負など、実施したスタッフにとっても嬉しい声をいただくことができました。

地域住民の健康意識向上と住民との関わりからの学生の学び

やましな健康フェスタはコロナ禍のため4年ぶりの開催、大学祭は予約なしの参加が3年ぶりに可能となりました。やましな健康フェスタでは市長も測定に参加されるなど、多くの地域の方々にとって健康を振り返る機会となったことをうれしく思います。今後、継続して開催し、健康チェックの機会として親しまれる活動になるよう、尽力していきたいと思えます。また、この相談会をきっかけに健康的な地域づくりにかかわることができればと願っています。

この健康相談には、多くの看護学生に加えて、今年度は他学部学生の参加がありました。学部を越え先輩・後輩が一緒に活動するなど学生同士が互いに学び合う機会になっています。また、英語の案内板を導入するなど、外国にルーツのある方々が参加できるような変化も取り入れています。学生にとっては、様々な年代の方々とのかわりの中で、安全で気持ちのこもった接遇や健康増進につながるかわりの方法を学ぶ場になっています。さらに、保健師国家試験を受験する学生にとっては、健康相談全体の運営方法を検討し、実施評価を行うなど実践を伴った学びの場となっています。今後も健康支援を通じた地域の活性化と、学生の学びにつながる事業を目指していきたいと思えます。



大学祭での様子



やましな健康フェスタでの様子 1



やましな健康フェスタでの様子 2

■ 地域連携活動

地域住民のニーズに寄り添うヘルスプロモーション活動

地域における『出張健康調査』の試み

健康科学部 理学療法学科×野洲市地域包括支援センター

取り組みの概要

理学療法学科では、2014年度より滋賀県野洲市と連携し、野洲市在住高齢者を対象に健康促進活動を行ってきました。例年では野洲市総合防災センターの一室をお借りして高齢者の健康調査に取り組んでいますが、本年度は新たな試みとして、野洲市西河原にあるコミュニティーセンターなかさで『出張健康調査』を実施しました。理学療法学科の学生38名（3回生37名、4回生1名）と教員5名により、参加高齢者157名の身体・認知・精神機能を調査しました。

調査結果の概要

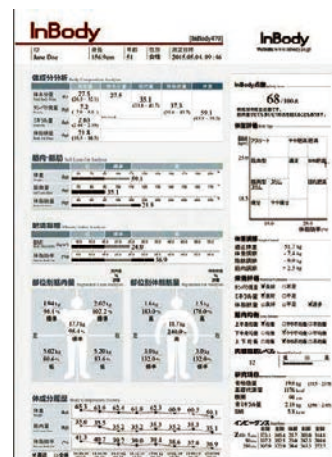
本年度の調査は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行して初めての調査となりました。参加者は調査期間5日間で157名となり、昨年度の82名を大きく上回って外出自粛の傾向も緩和されている様子でした。参加者の内訳は、70代が最も多く（54%）、80代を合わせると全体の84%を占めていました。性別では女性が72%と大多数を占め、男性の28%を大きく上回りました。

参加者の体力は、男女ともに下肢筋力は全国平均を上回っており、握力は全国平均と同等のレベルでありました。一方で、立位バランスや歩行能力は全国平均を下回る結果となりました。認知機能については、認知症の疑いがある高齢者は1%、認知症予備軍とされる軽度認知障害のある高齢者は29%で、3割の高齢者に認知機能の問題を認めました。精神機能については、16%の高齢者にうつ傾向を認める結果となりました。

出張健康調査は、調査期間5日間のうち最終日に実施し、参加高齢者29名を調査しました。認知機能や精神機能は野洲市総合防災センターの参加高齢者と差はありませんでしたが、身体機能の中でも下肢筋力や歩行能力は野洲市総合防災センターの参加高齢者よりも低い結果となりました。このことから、出張健康調査を実施することで、身体機能が低い近隣の高齢者の参加を促進することに繋がった可能性があります。

取り組みの成果

本年度の新たな試みであった出張健康調査も盛況となり、野洲市や参加者の方から喜びの声をいただきました。学生は、実際に地域で暮らす高齢者を対象に身体・認知・精神機能の調査を行うことで、高齢者の健康状態を多角的に捉える視点を養うことができました。また、調査結果は参加者に即日返却し、参加者の体力年齢や体組成分析の結果を学生が個別にフィードバックしました。測定結果を解釈し、フィードバックする難しさを体験できたことは、学生にとって大変貴重な機会となりました。



■ 地域連携活動

地域高齢者の健康増進活動 自身のやりたいことを見つけて生活を豊かなものに

カードゲームで「意味のある作業」を見つけよう

健康科学部 作業療法学科

取り組みの概要

2020年より吹田市の図書館「健都ライブラリー」にて地域高齢者の健康増進（介護予防）活動がスタートしました。内容は大学生と一緒に運動やものづくり（主に手芸）を月1回、1時間～2時間ほど行うものです。学生と楽しみながら活動することで地域高齢者の健康増進を図っています。スタートした当初はまさにコロナ禍であり、中止になることもしばしばありましたが、そのことが逆に「つながり」の重要性を再認識するきっかけにもなりました。「みんなで笑うと気持ちが丈夫になる」と当時の参加者がおっしゃられていました。

健康増進＝「自分のやりたいこと」を行う

「健都ライブラリー」の活動も4年目を迎えました。今は学生主導で企画をたてるようになり、参加者の皆様も毎回喜んでくださいます。ただ、そこで、ふと自宅でも日々楽しく過ごすことができているのだろうかという疑問がわきました。集いの場で楽しんでもらい、なおかつ自宅でも自分のやりたいことをやって「ハリ」のある生活を送っている・・・そんな充実した毎日が健康増進に一番よいのではないかと考えました。高齢者の方は心身機能の衰えに環境的問題が加わって、本来やりたい作業（活動）ができていない人が多くいらっしゃいます。作業療法士は、本人にとってやりたい作業、大事な作業を「意味のある作業」としてしています。健都ライブラリーに参加している高齢者自身に「意味のある作業」ができていないのかを考えてもらうことにしました。

カードゲームで自身の「意味のある作業」をみつけよう

「意味のある作業」を考えてもらううえで、有効と考えたのがカードゲームです。まず、趣味活動、仕事、運動などの作業が書かれているカードを参加者に配ります（①）。次に、自分にとって重要な作業（今できていない作業）をカードから選びます（②）。最後に、参加者4人と学生がグループで、その作業への思いを語ってもらいます（③）。カードというツールを媒介し、グループで語り合うことでゲーム的な雰囲気生まれ、自分にとって「意味のある作業」「今はできていない作業」が自然に口から出てきます。2023年度は学生に協力してもらいながら、このカードを作成し、ルールも一緒に考えました。出来上がったカードゲームを学生と一緒に健都ライブラリーで実施したところ、大いに盛り上がりました。参加者の中に「陶芸教室に通えていない」といった方もおられましたが、このカードゲームを通して、陶芸教室に行くようになり、作品も持ってきてくださいました。「意味のある作業」の実現は身体のみならず、精神、社会的に豊かにします（ウェルビーイング）。学生にとっても、それを実感する貴重な経験になったのではないかと思います。



①色々な作業が書かれたカード
(計 38 枚)



②意味のある作業を選ぶ



③意味のある作業を語る

■ 地域連携活動

住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるために

図書館との連携による地域に向けた認知症普及啓発活動

健康科学部 作業療法学科 × 醍醐中央図書館、京都市健康長寿企画課

活動の概要

この活動では、京都市の図書館と連携し、地域に向けて認知症に関する情報を発信するとともに、社会資源と連携した普及啓発活動について学生が実践を通して学んでいます。

活動の背景と経緯

2019年に厚生労働省から発表された認知症施策大綱では、認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる「共生」を目指し、通いの場の拡大など「予防」の取組を推進することが掲げられています。日本では世界に例を見ない少子高齢化の中で高齢者の5人に1人が認知症になると推計されています。認知症の人を支援する専門職である作業療法士にとって「予防と共生」に寄与することは重要なミッションでもあり、我々教員もサポーター養成講座や認知症カフェといった取組に参画しています。一方で公共図書館についても、認知症施策推進大綱の中で認知症啓発における重要な拠点であることが明記されており、すべての人が利用しやすい図書館にすることで身近な通いの場となることが期待されています。京都市の醍醐中央図書館では認知症に関する書籍の展示や講演会のみならず、高齢者施設や病院に出向いてのサロンや講座を実施するなど、様々な取組を実施されています。地域に向けた活動で度々ご一緒させていただく中で、双方の想いが合致したことから連携が始まりました。

2023年度の活動

3回生科目である地域包括ケアシステム演習の中で、講師として醍醐中央図書館司書の方をお招きし、図書館の視点からみた地域課題や取組について講義していただきました。学生は公共図書館が認知症普及啓発の拠点となることを学び、認知症に関する書籍のPOPを作成しました。このPOPはアルツハイマー月間に合わせて図書館で実施される特別展示に活用していただきました。また、京都市は認知症普及啓発のための取組「認知症とともに2023」を実施しており、POP作成の様子などを「#京都オレンジ色プロジェクト」を通して発信しました。これらを企画している健康長寿企画課とも連携し、学生が作成したPOPをデジタルブックに活用していただきました。このように学生は認知症普及啓発活動への参画を通して、図書館が本を読む、借りるだけの場所ではなく、地域支援の拠点として連携できる社会資源のひとつであることを学んでいます。



京都市健康長寿企画課との企画会議の様子



認知症啓発デジタルブックの表紙



認知症に関する展示のひとつに
学生が作ったPOPを活用

■ 地域連携活動

地域住民、京都市、大学の連携による世代間交流の創出

山科団地地区における世代間交流を用いたヘルスポモーション

健康科学部 作業療法学科×山科団地

地域のニーズとコミュニティ活性化のための世代間交流の取組

団地における少子高齢化やコミュニティの衰退は全国的な課題となっています。山科団地は昭和40年代に建てられた大型団地で、高齢化率が分譲住宅52.0%、市営住宅50.8%（平成30年1月現在）と極めて高く、京都市はこの地区を「京都刑務所敷地の活用を核とする未来の山科のまちづくり戦略」の中で、大学などとの連携によってコミュニティの活性化を図るエリアに指定しています。令和元年度に、本学、京都市、山階・西野学区自治連合会が連携し、住民に対する今後の山科団地地区の在り方に関するアンケート調査を行いました。その結果、高齢者から若者まで多世代が交流することによるコミュニティ活性化が求められていることが明らかになりました。その結果をふまえ、令和2年から団地集会所を活用した健康イベントを年間4～6回程度実施し、健康をテーマにした講話やものづくり、学生が企画した体操を通して地域住民同士のつながり作り、地域と大学とのつながり作りを続けています。この活動は『京都橘大学作業療法学科「つながる」プロジェクト』として令和2～4年度の山科きずな支援事業に採択され、その間COVID-19の影響もある中で延べ300名以上の住民の参加がありました。令和5年度も地域住民、京都市、大学が連携しながら地域活性化を目的とした活動を継続しています。

学生による山科団地でのヘルスポモーション活動

令和5年度は、団地での実践を作業療法学科3回生科目「ヘルスポモーション作業療法学」「地域包括ケアシステム演習」と関連付け、学生は地域課題解決のために自分たちの知識や専門性をどのように活かすことができるかを考え、自分たちでイベントを計画、実践するアクティブラーニングの場としました。また、フードバンク事業を実施している認定NPO法人の協力を得て、イベント時に食品ロス削減の取り組みを併せて実施することで参加人数や参加者層の拡大を図りました。今年度は6回のイベントで延べ311名の方に参加していただくことができ、昨年よりも多くの方にイベントを通して交流していただくことができました。参加した高齢者の方々からは、「老人クラブの活動がなくなり外出が少なくなる中で外に出られる機会ができて嬉しく思っています」「初めての方とお話できました」「学生さんの若い力に元気をもらっています」といった声をいただきました。この活動が地域の方にとって参加や交流の場のひとつになると共に、学生にとっては参加者とのコミュニケーションを通して地域の現状を肌で感じることや、これまで学んできたことを実践する貴重な機会となっています。



ものづくりを通じた交流の様子



健康をテーマにした活動を学生が企画、実践



「捨てられる食品を減らそう運動」で賞味期限が近い食品を配布

■ 地域連携活動

救急救命士養成課程学生による

一次救命処置 (BLS) と応急処置の普及活動

健康科学部 救急救命学科

一次救命処置 (BLS) の重要性と普及活動の概要

心臓が原因で突然心停止となる人は、1年間で約8.2万人にのぼります¹⁾。

心停止に陥った人を救命するためには、迅速な心肺蘇生と自動体外式除細動器 (Automated External Defibrillator : 以下 AED) による電気ショックがカギを握っています。しかし、これらの処置が1分遅れるごとに救命率は約10%ずつ低下します。

現在、119番通報をしてから救急車が到着するまでの平均時間は9.4分です²⁾。その場に居合わせた一般市民の方々 (bystander) が、迅速に一次救命処置 (Basic Life Support : 以下BLS) を実施することで、命を救える可能性が非常に高くなります。

そこで本学科では、教員と学生が協力をして、一般市民の方々にBLSと応急手当の普及活動を行っております。

- 1) 公益財団法人日本AED財団; 心臓突然死の現状 (最終アクセス: 2023.12.18)
- 2) 総務省消防庁 令和4年版救急・救助の現況 (最終アクセス: 2023.12.18)

活動の狙い

本活動の狙いは、大きく分けて2つあります。

1つ目は、多くの方々にBLSと応急手当を知っていただくことです。前述のとおり、突然の心停止から命を救うためには、一般市民の方々の協力が必要不可欠です。学校や幼稚園の先生方は、いざという時に子どもの命を救うために、知識と技術を習得することが重要です。また、子どもたちは、この活動を通じて命の尊さに触れることができます。幼い頃から命について真剣に考えることで、将来のbystanderを育成することができます。

2つ目は、当学科学生の知識の定着とコミュニケーション能力の向上です。BLSや応急手当を教えている学生は、日々救急救命士になるための勉強に励んでおります。授業や実習でインプットしたことを、活動を通してアウトプットすることで、知識を深めることができ、より確実な知識の定着に繋げることができます。また、インストラクションを行うことで医療従事者として必要なコミュニケーション能力の向上を図ることができます。

2023年度活動実績

今年度は、山科区内のこども園や小学校の他に京都市内の保育園や中学生等を対象に、BLSと応急手当の普及活動を行いました。また、学外だけでなく、学内他学科の学生に対しても実施しています。普及活動を通じて、地域住民と学生が一緒になって救命率の向上に繋がるように活動を続けていきます。

- 4月8日 (土) 朱一保育園 対象: 職員50名 (参加学生: 4名)
- 5月27日 (土) 京都橋中学校・高等学校 対象: 近隣の小学3~6年生 (参加学生: 5名)
- 6月16日 (金) 円町まがね隣保園 対象: 職員22名 (参加学生: 4名)
- 6月28日 (水) 安朱小学校 対象: 小学6年生37名 (参加学生: 7名)
- 7月5日 (水) おおやけこども園 対象: 保育士、幼稚園年長クラス (参加学生: 5名)
- 11月22日 (水) 京都橋中学校・高等学校 対象: 中学生72名 (参加学生: 20名)



安朱小学校での活動



京都橋中学校・高等学校
ドリーム☆スクールでの活動

■ 地域連携活動

駅伝を通じてふれあいの場を

第1回 山科ふれあひあおぞら駅伝 運営・救護

救急救命サークル TURF

(健康科学部 救急救命学科、看護学部 看護学科 学生有志)

活動概要

山科ふれあひあおぞら駅伝は、今まで実施していた山科区内の小学生の駅伝大会が終了してしまったことから、地元の有志により企画されました。救護の依頼をいただき、救急救命学科と看護学科の学生が所属している「救急救命サークルTURF」としてイベントに参加しました。

イベント開催に向けて山科ふれあひ駅伝実行委員会の方々と、現地視察や救護体制の構築に向けた打合せを行いました。学生を中心に天候やタイムスケジュールから傷病者の発生を予測し、必要資器材、救護班や誘導配置を決定しました。

活動の狙い

活動の狙いは、山科ふれあひあおぞら駅伝を通じてイベントの救護体制を構築することです。

近年、マスギャザリングイベントでの事故や多数の体調不良者発生のニュースが後を絶ちません。これらは、運営側の意図しない規模の群衆や悪天候などの条件が重なって起きています。

今回、最も懸念されたのも、参加者数の予測ができないことでした。特に未就学児から大人まで幅広い世代が参加するため、病気やケガの発生を幅広く考える必要がありました。また、コース上に番号を割り当て、位置情報の伝達が迅速に行えるよう工夫し、近隣の消防署へコースを共有するなど、緊急時に備えた救護体制を構築しました。

取り組み

大会当日は、レース参加者400名、実行委員会やスタッフ87名(うち京都橘大学30名)が参加しました。学生は救護をはじめ、司会、誘導、飲食ブースの補助などの運営に携わりました。競技は、親子マラソン1km、小学生駅伝(1.9km×5区間)、一般駅伝(1.9km×5区間)など、老若男女問わず楽しめる大会になりました。実際に救護を行ったのは、転倒による負傷が1名、気分不良による疾病が3名でした。いずれも軽症で傷口の洗浄や経口補水液を飲んでもらうなどして対応しました。

今後も山科ふれあひあおぞら駅伝を通じて、地域に根差した安全なイベント開催のための救護体制を構築していきたいです。



競技中の救護・誘導



運営スタッフ集合写真

■ その他の地域連携活動一覧 (教育) (研究) (社会貢献)

① 地域を対象とした教育活動

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	教育活動の内容や成果
文学部	日本語 日本文学科	異文化交流演習 1	野村幸一郎	岡崎公園 二条城 平安神宮	50名	フォト俳句作成のための吟行を行った。
文学部	日本語 日本文学科	書法Ⅱ、仮名古典研究、 書法Ⅳ、作品研究Ⅳ	尾西正成	京都市美術館	121名	京都市美術館で開催された日展京都展を鑑賞。寺坂・尾西がギャラリートーク。作品についてレポートを課した。
文学部	日本語 日本文学科	書法Ⅱ、仮名古典研究、 書法Ⅳ、作品研究Ⅳ	寺坂昌三	京都市 京セラ美術館	110名	水穂書展を見学し、細字・中字・大字作品それぞれの筆遣いや作品の特徴を学び、使用する料紙や表具も含めた効果的な制作を学んだ。
文学部	日本語 日本文学科	書法Ⅳ、かな古典研究Ⅱ ab、 書法Ⅶ ab	寺坂昌三	兵庫県神戸市 原田の森ギャラ リー	85名	正筆会展を見学し、細字・中字・大字作品それぞれの筆遣いや作品構成の特徴、料紙や表具も含めた効果的な制作について学んだ。
文学部	歴史学科	京都産業文化論Ⅰ	山内由賀	京都市	107名	京都市で発展してきた伝統産業について学び、地域の歴史と産業への理解を深め、関心を高めた。
文学部	歴史学科	京都産業文化論Ⅱ	野田泰三	京都市	35名	京都市で生まれ、活動を続ける現代企業群について学び、京都産業の現在について理解を深め、関心を高めた。
文学部	歴史学科	京都の歴史と文化遺産	増淵徹	京都市	47名	京都市域に残る多様な歴史遺産について、講義・見学を通して理解を深め、それらを保存・活用・継承していくための問題意識を深めた。
文学部	歴史遺産 学科	歴史遺産学実習Ⅰ・Ⅱ	有坂道子	京都市	2回生	江戸時代京都の商家近江屋の古文書解読調査を行った。
文学部	歴史遺産 学科	歴史遺産学実習Ⅲ・Ⅳ	有坂道子	京都市	3回生	伏見区内海家の古文書解読調査、江戸時代京都の商家麴屋の古文書解読調査を行った。
文学部	歴史遺産 学科	歴史遺産学実習Ⅲ・Ⅳ	中久保辰夫	兵庫県三木市	3回生	三木市史編さん事業に関わる窟屋ノ坂古墳出土須恵器の実測を行った。
文学部	歴史遺産 学科	歴史遺産学実習Ⅲ・Ⅳ	中久保辰夫	京都市山科区	3回生	山科「ふるさとの会」と連携した岩屋神社神宮地墓地の三次元計測を行った。

発達教育 学部	児童教育 学科	教育演習Ⅰ	佐野仁美	京都市山科区	13名	音楽に関心を持つ学生が集まる佐野ゼミの活動の一環として、7月3日に山科区のもものき子ども園でアウトリーチ活動を行った。5歳児を対象とした「たなばたまつり」において、学生が計画、選曲等を行い、トーンチャイムをはじめとする楽器を演奏した。その後、子どもたちと一緒にダンスを踊り、折り紙のメダルを渡して交流を深め、楽しんだ。子どもたちの前で表現し、子どもたちとコミュニケーションをとる力とともに、企画を立案する力がついたことと思われる。
------------	------------	-------	------	--------	-----	---

総合心理 学部	総合心理 学科	マーケティング調査演習	永野光朗	イオンタウン 山科柳辻	3回生 14名	イオンタウン山科柳辻にて来街者を対象にした面接調査を実施し、201名の方にご協力をいただいた。2月上旬に店舗の方への調査報告会を実施した。
------------	------------	-------------	------	----------------	---------	---

経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅰ	岡田知弘	京都市	19名	京都の観光に関する調査を始めるための基礎的情報を得るために東山区役所でヒアリングのあと現地調査を行った。
経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅱ・Ⅲ	岡田知弘	京都市	15名	5つのチームに分かれ、二年坂における町並み保全の取り組み、レンタル着物店の増加と和装需要創出との関係性、和菓子業界の現状と課題、コミュニティカフェ成立の背景と取り組み、そして宇治茶を生かしたまちづくりについて調査を実施し、報告書にとりまとめた。
経済学部	経済学科	クロスオーバー型 課題解決プロジェクト	岡田知弘	京都市 東山区役所	30名	京都市東山区役所と連携して、区内定住人口の増加のための提案を行った。
経済学部	経済学科	アカデミックスキル	竹内直人	福井県おおい町	25名	5チームに分かれ、おおい町の地域課題(観光振興、産業振興、まちづくり)について、町職員の講義を受けたのちに、その解決策を考え町長、町議会議員、町の幹部職員にプレゼンテーションを行った。
経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅰ・Ⅲ	平賀緑	京都市山科区	33名	山科区で農業を営む「うつみ農園」における農作業を通じて、都市部で農業を続ける意義、農家としての生き様などを体感した。
経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅱ	平賀緑	滋賀県 近江八幡市	15名	NPO法人百菜劇場(代表 廣部里美さん) 圃場における農作業を通じて、世界農業遺産「びわ湖システム」、生物多様性、有機農業、アグロエコロジーを体感した。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	教育活動の内容や成果
経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅲ	平賀緑	京都市山科区 (大学)	15名	京都市環境保全活動推進協会「エコ学区サポートセンター」企画により、「持続可能な農業と小さな菜園体験会～マイ家庭菜園を作ろう!」実習を実施。株式会社中嶋農園の中嶋氏の指導のもと、学生たちが各自の家庭菜園を作った。
経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅱ・Ⅲ	福井弘幸	京都市総合企画局・山科区役所 地域力推進室	15名	山科区の空き家活用、京都刑務所空き地を核としたまちづくり、子育て世代が住みやすい街山科の3つを研究テーマにし、仮説をたて、区民へのインタビュー調査を基にパワーポイント作成及びプレゼンテーションを実施した。
経済学部	経済学科	プロジェクト演習Ⅲ	前田一馬	古川町商店街 (京都市東山区)	14名	京都市東山区の古川町商店街の3店舗に歴史や課題、こだわりについてヒアリング調査を行った。

経営学部	経営学科	公共マーケティング/ 文化資源デザイン論	木下達文	滋賀県 近江八幡市	180名	地域課題を地域文化資源の再評価の側面から考える授業であり、2020年度から教員が連携している近江八幡市を対象としている。今年度も新型コロナウイルスの影響はあったが、1日のみのフィールドワークを実施し、地域課題の分析と現地調査を行った。
経営学部	経営学科	プロジェクト演習Ⅰ	山野薫	南丹市 京都市	18名	京都府内において、食品関連事業者がどのような商品を製造し、どのような販売方法をとっているのか、日頃食している食品はどのように製造・流通過程を経ているのかを学習するため、雪印メグミルク京都工場(南丹市)、小川珈琲株式会社(京都市右京区)にて工場見学・店舗見学を行った。
経営学部	経営学科	プロジェクト演習Ⅱ・Ⅲ	山野薫	京都市	17名	岩本印刷株式会社(京都市南区)にご協力をいただき、社長講演会や会社見学会を実施して、ビジネスに対する考え方や、社会の動向とビジネスの関係などを学んだ。これらの活動から得たことを生かし、自らの問題意識に基づいたビジネスプランを考案して、学部主催のビジネスコンテスト「ビジネスアンドパブリックピッチ(BPP)」へ出場した。

工学部	情報工学科	プロジェクトマネジメントⅠ	杉浦昌 中村嘉隆 平石拓	京都市山科区	約150名	プロジェクトマネジメントの方法の学習の一環として、山科区の課題の解決策を提案するという実習を行った。実習は区と連携して実施し、職員の方々に教材ビデオの提供、区が解決すべき課題の提示、および学生の発表内容の評価などを行っていただいた。
工学部	情報工学科	クロスオーバー型 課題解決プロジェクト	工藤寛樹	滋賀県長浜市	42名	滋賀県長浜市田根地区の地域おこしの観点から地域との連携企業創出のため、地域住民らのアンケート結果や地域に関連するデータに対するAI技術を活用した分析を行い、発表会を開催しプレゼンテーションによる提案を行った。発表会では長浜市役所の職員の方々や田根地区の地域おこしに関わるの方々にフィードバックをいただいた。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅰ、Ⅱ	河野良平	京都市	23名	京都市交通局主催の駅ナカアートプロジェクトに参加し、地下鉄・柳辻駅の壁面に設置するアートワークを制作した。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅲ、 専門演習Ⅳ	河野良平 松本正富	京都市	13名	四条通地下道大学連携事業に参加し、地下道に設置するアートワークを制作した。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅲ	鈴木あるの	滋賀県日野町	11名	日野まちなみ保全会と連携し、同町内の日野商家3家屋(うち2家屋は非公開)の見学および事務局長からのこれまでの保存活用の経緯についての講演、さらに伝統料理を継承する会代表の講演もうかがった。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅲ	鈴木あるの	京都市	11名	京都市内で不動産業を営む内山産業株式会社代表取締役内山佳之氏に、京町家や周辺の古民家の取引についての講演をいただき、学生の古民家改修提案についての意見交換を行った。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅲ	鈴木あるの	滋賀県日野町	11名	(一社)近江日野商人島崎の家保存会代表理事の西村吉弘氏に御来学いただき、歴史的建造物保存に関わる経営的観点についてご講演をいただいた。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅲ	鈴木あるの 松本正富 平井良祐	大阪府大阪市	33名	大阪にて歴史的建造物の修復等に関わっている表具店から一級表具師である中野智佳子氏にご来学いただき、和紙の扱いについてのワークショップを行った。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅳ	鈴木あるの	滋賀県日野町	11名	(一社)近江日野商人島崎の家保存会と連携し、学生による同邸の保存活用提案を発表し、副町長、町会議員、町役場職員ほか、町なみ保全に関わる役職者20名と意見交換会を行った。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅳ	鈴木あるの	奈良県奈良市	11名	重要文化財藤岡家住宅(非公開)にて、江戸期から続く大和商家の建築および経営の歴史や作法について当主夫妻からの講演をいただき、店構えの複雑な構造の開閉や竈門の炊き方の体験を行った。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	教育活動の内容や成果
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅳ	鈴木克彦	大阪府大阪市	12名	(株)松本空間工房が主催する「第17回インテリアプランコンテスト」に取り組み、8案を提出した。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅳ	鈴木克彦	大阪府大阪市	12名	通称「裏にっぽんばし」と言われるオタロードの裏街区一帯のまちづくり実態を調査し、空き家のリノベーションに取り組んでいる設計事務所と意見交換を行った。
工学部	建築デザイン学科	建築プロジェクト演習Ⅳ、専門演習Ⅳ	鈴木克彦	奈良県奈良市	20名	大和ハウス総合技術研究所を視察し、最新の住宅建築技術について学んだ。

看護学部	看護学科	生涯健やか看護学実習Ⅰ	征矢野あや子 深山つかさ 座光寺佑樹 加藤ゆかり 森彩美	京都市山科区 (大学)	1回生 98名 4回生 8名	生涯健やか看護学実習Ⅰとして、山科区老人クラブ連合会との共催で「体力測定会」を2回に分けて本学で行った。1回生は体力測定の準備を行った後、参加者とペアになり、体力測定を行った。4回生はTAとして下回生の指導助言を行った。また、保健師課程の学生と教員が認知症予防に関する健康教育を実施した。参加者は合計約120名であった。
看護学部	看護学科	生涯健やか看護学実習Ⅰ	深山つかさ 加藤ゆかり 森彩美	京都市山科区	1回生 21名	山科区老人クラブ連合会が実施する美化ウォーキングに参加した。3つのコースに分かれ、ゴミを拾いながら高齢者と交流を深めた。
看護学部	看護学科	生涯健やか看護学実習Ⅰ	座光寺佑樹	滋賀県大津市	1回生 21名	志賀ブロック老人クラブ連絡協議会主催ニュースポーツ交流会に参加し、活動をサポートした。
看護学部	看護学科	生涯健やか看護学実習Ⅰ	松本賢哉 征矢野あや子 深山つかさ 座光寺佑樹 加藤ゆかり 森彩美	大津市石山体育館、大津市瀬田体育館、大津市和邇体育館、大津市坂本市民体育館	1回生 97名	大津市老人クラブ連合会との共催で「新体力測定」を、3回に分けて行った。1回生は参加者とペアになり、血圧測定など高齢者の健康状態などについて評価した後、体力測定を行った。参加者は約100名であった。

健康科学部	救急救命学科	JPTECプロバイダーコース	西本泰久 関根和弘 澤田仁	京都府	4回生 45人	外傷傷病者に対する現場アプローチを習得するコースに参加した。
健康科学部	救急救命学科	JPTECインストラクターコース	西本泰久 関根和弘 澤田仁	京都府	あり	外傷傷病者に対する現場アプローチを習得するコースに参加した。
健康科学部	救急救命学科	机上図上訓練エマルゴ	久保山一敏 西本泰久 関根和弘 他教員	京都市山科区 (大学)	3回生 50人 卒業生	救急救命災害演習において、災害机上図上訓練であるエマルゴを実施した。
健康科学部	救急救命学科	日本臨床救急医学会PACCコース	福岡範恭	近畿	3回生	日本臨床救急医学会認定の病院前循環器救急疾患に対する実技講習会に運営タスクとして参加した。
健康科学部	救急救命学科	日本臨床救急医学会PACCコース	福岡範恭	近畿	あり	日本臨床救急医学会認定の内因性疾患に対する実技講習会に傷病者役として参加した。
健康科学部	救急救命学科	京都橘中学校・高等学校 地域還元事業 ドリーム☆スクール	郷田爽真	京都橘中学校・ 高等学校	5名	京都橘中学校・高等学校にて、小学生50名を対象にBLS講習を行った。



②地域を対象とした研究活動

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	研究の内容や成果
文学部	日本語 日本文学科	樋口一葉作「十三夜」の世界 解説	辻本千鶴	城陽市	11月22日、文化パルク城陽で実施された催しで「1部 解説」を担当、講演を行った。
文学部	歴史学科	神社所蔵文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究	野田泰三	賀茂別雷神社(上賀茂神社)ならびに京都周辺地域	科学研究費補助金基盤研究(A)(2022～2026年度、研究代表者:金子拓)の研究分担者。
文学部	歴史学科	特定共同研究「賀茂別雷神社文書の調査・研究」	野田泰三	賀茂別雷神社(上賀茂神社)ならびに京都周辺地域	東京大学史料編纂所の特定共同研究(代表:金子拓)。昨年度から継続。賀茂別雷神社文書の分析を通し、同社の神事・祭祀、賀茂六郷の支配構造、京都周辺地域の社会・政治構造を解明することを目的とする。
文学部	歴史学科	京都の蹴鞠史の研究	尾下成敏	京都府など	16世紀の京都の蹴鞠の会を対象に、女性が蹴鞠とどう関わったかを論じた、「戦国時代の鞠足「中納言」について」という小文を執筆し、「女性歴史文化研究所紀要」特集号において公表した。
文学部	歴史遺産 学科	彦根藩史料調査研究	有坂道子	滋賀県彦根市	彦根城博物館による館蔵史料の共同研究。
文学部	歴史遺産 学科	神河町史編纂	村上裕道	兵庫県神河町	神河町史執筆のため、町内ダム調査などを実施した。
文学部	歴史遺産 学科	三木市史の編さん	中久保辰夫	兵庫県三木市	三木市史執筆のため、三木市内考古資料の実測作業などを実施した。
文学部	歴史遺産 学科	高島市内遺跡調査	中久保辰夫	滋賀県高島市	高島市の文化財調査について、下平古墳群等の調査などを市教育委員会の要請により、実施した。
文学部	歴史遺産 学科	中富片山古墳の測量調査	中久保辰夫	兵庫県加西市	加西市の中富片山古墳について、測量調査を実施した。
文学部	歴史遺産 学科	山科区内考古遺産の解説	中久保辰夫	京都市山科区	山科「ふるさとの会」の要望に応え、ふるさと山科再発見 第4・5回「山科の遺跡・遺産巡り」において、日ノ岡堤谷築跡、安祥寺の解説などを行った。
文学部	歴史遺産 学科	国指定史跡「三木城跡及び付城跡・土塁」発掘調査検討委員会委員	中久保辰夫	兵庫県三木市	「三木城跡及び付城跡・土塁」発掘調査について、指導助言を行った。

発達教育学部	児童教育学科	日本人の音感を重視した保育の共同研究	佐野仁美	滋賀県草津市	たちばな大路こども園の保育者との共同研究を行った。日本人の音感を重視した保育実践のために、「おまつり」に関する絵本や楽器を提案し、9月の運動会で5歳児が表現した「よっちょれ」から広がった「おまつり」についての3～5歳児の保育を2023年11～12月に参観した。参観後、保育者や、園長、副園長から取り組みにおける子どもの様子について、聞き取り調査を行った。実践結果はまとめて学会等で発表する予定である。
--------	--------	--------------------	------	--------	--

経済学部	経済学科	京都市における大学生と地域団体による長期的な地域連携活動の実態とその支援の在り方についての研究	岡田知弘 上田健作 小山大介 大田雅之	京都市	大学コンソーシアム京都の指定調査課題に基づく表題の調査を行った。
------	------	---	------------------------------	-----	----------------------------------

経営学部	経営学科	食品ロス削減を目指したフードドライブ活動ならびに子ども食堂への取り組みに関する研究	山野薫	大阪府大阪市、枚方市、豊川川市	食品ロス削減を目指したフードドライブ活動ならびに子ども食堂への取り組み実態を明らかにするために、生活協同組合おおさかパルクの取り組みを事例に取り上げ、関係者への聞き取り調査や現地見学を行った。
------	------	---	-----	-----------------	--

工学部	情報工学科	焼却炉AI自動化に関する研究	加藤丈和 西出俊 工藤寛樹	京都 環境保全公社	産業廃棄物の焼却炉において、不完全燃焼や有害ガスの排出を抑えるために、ゴミの種類や焼却状態に合わせて空気量やゴミ投入量をAI技術を使って自動制御するシステムの研究開発。オペレータがおこなっている制御データから、焼却炉の温度、ガスの含有率から空気量を予測するシミュレーションを行った。
工学部	建築デザイン 学科	高経年分譲マンションの長寿命化に向けた管理方針に関する調査	鈴木克彦	京都市	国土交通省による支援の下、京都市と協力して高経年の京都市内の分譲マンションの管理実態をヒアリング調査し、その成果を国及び京都市のマンション政策に反映させるべく取りまとめた。

看護学部	看護学科	地域在住高齢者と繰り返し交流することによる看護学生の学びの変化ー生涯健やか看護学実習Ⅰ(体力測定)での取り組みを通してー	深山つかさ 征矢野あや子 足立真実子 座光寺佑樹 松本賢哉	京都市山科区	地域在住高齢者と学生が体力測定を通して繰り返し交流することによる、学生の学びの変化について明らかにした。
------	------	--	---	--------	--

健康科学部	理学療法 学科	地域在住健康高齢者の体力維持に必要なトレーニングに関する研究	宮崎純弥	滋賀県守山市	地域在住健康高齢者を対象にエロンゲーショントレーニングを実施してもらい、体力維持が可能か否かについて研究を行った。健康高齢者20名を対象に実施した。守山市地域包括支援センターと共同で実施した。
健康科学部	理学療法 学科	脳・身体機能の加齢変容に関する研究	中野英樹	京都市	高齢者を対象として、脳機能と身体機能の客観的・定量的評価を行い、それらの機能が加齢に伴いどのように変容するかどうかについて研究を行った。なお、本研究は国立研究開発法人情報通信研究機構との共同研究で実施した。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	研究の内容や成果
健康科学部	理学療法学科	学童期の子どもの身体・精神心理機能と子ども口コモに関する研究	安彦鉄平	京都市山科区	子どもたちの運動機能の健やかな発達に寄与することを目的に、理学療法学科と大宅児童館が連携し、実施した。体力測定会は2023年8月9、10日の2日間で実施し、84名の子どもたちを測定した。
健康科学部	作業療法学科	就労的活動の定義策定	小川敬之	東京都健康長寿医療センター研究所	全国の就労的活動の事例収集、文献検討、厚労省との会議などを行った。
健康科学部	作業療法学科	ICTを活用した高齢者と学生の協同によるヘルスプロモーションと学びの実践モデル	佐川佳南枝	京都市・奈良県山添村	ものづくり教室のプログラムの中で高齢者や学生とともにプログラムの改良を進めながら対面接触ができない状況でも可能なICTを活用した、高齢者と学生の協同によるヘルスプロモーションと学びのモデルを提示することを目的としている。
健康科学部	作業療法学科	認知症の人を介護する家族(主たる介護者)の介護力評価尺度の開発	菅沼一平	家族の会各都道府県支部	在宅で認知症の人を介護する家族主介護者の心理面と生活状況を包括的に評価する「介護力評価尺度」を開発する。(データ収集終了、現在分析中)。
健康科学部	作業療法学科	地域高齢者の作業機能障害に影響する要因に関する研究	菅沼一平	大阪府吹田市	地域在住の健常高齢者対象、高齢者の作業機能障害(作業不公正)に関連する要因を調査(データ収集終了、現在分析中)。
健康科学部	作業療法学科	一次予防における主体価値を軸とした持続可能な介護予防プログラムの開発	菅沼一平	大阪府吹田市	地域高齢者を対象に作業に焦点を当てた介護予防を行い成果を見る(現在は予備的に調査を行っている)。
健康科学部	作業療法学科	作業療法士による特別支援学校(知的障害)でのコンサルテーションに関する研究	原田瞬	大阪府堺市	作業療法士による地域支援の1つである特別支援学校でのコンサルテーションが、対象児童生徒、教員に及ぼす効果を明らかにすることを目的に効果検証研究を実施している。作業療法士の助言内容に関する分析がAsian Journal of Occupational Therapyに掲載された。
健康科学部	作業療法学科	地域活性化を目的とした世代間交流のあり方とその効果に関する研究	原田瞬 小川敬之 菅沼一平 川崎一平	京都市山科区 山科団地エリア	山科団地エリアの住民を対象に、世代間交流が地域活性化に及ぼす影響を調査している。
健康科学部	救急救命学科	文部科学省「成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業」	平出敦 関根和弘 澤田仁	京都市	救急救命学領域に精通した医療従事者の養成のために、救急リカレント「感染防護研修コース」を開講した。感染防護服の着脱やマスクフィットテスターによるマスクの着用方法指導を行った。現役の職業人のための専門的な内容のリカレント教育の分野でオンデマンドで実施した。
健康科学部	救急救命学科	病院外心停止(OHCA)に対する、バイスタンダーによる早期除細動実現に関する研究(情報工学科との合同研究ユニット)	関根和弘 郷田爽真 齋藤汐海	京都市山科区	AEDマップの適切な更新がなされているかは不明である。現在、設置されているAED実機とAEDマップの相違についての検討を行い、問題点の抽出と改善案を算出し、早期発見と早期除細動の実現を達成目標とし検討をする。
健康科学部	救急救命学科	4年制大学学生のBLS講習指導者としての経験についての質的研究	澤田仁 齋藤汐海 郷田爽真他	京都橘大学他	4年生大学の学生が学内外で開催されるBLS講習に指導者として参加した経験をどのように感じているかを質的に検討し、学生がBLS講習を指導するうえでの課題を明らかにする。

③地域を対象とした社会貢献活動

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	活動の内容や成果
文学部	歴史学科	自治体史の編纂	野田泰三	京田辺市 大阪府摂津市 奈良県五條市	なし	各市史の編纂委員、編さん専門員として市史刊行事業に協力した。
文学部	歴史学科	講演会	尾下成敏	京都市	なし	「徳川家康と朝廷」というタイトルで、一地方大名であった時代の家康と朝廷の関係について講演を行った。
文学部	歴史学科	講演会	尾下成敏	滋賀県長浜市	なし	長浜市主催のフォーラム「羽柴秀勝の再評価」の中で、「於次秀勝について」というタイトルで講演を行った。織田信長の子で豊臣秀吉の養嗣子であった羽柴秀勝に関する講演である。
文学部	歴史学科	講演会	尾下成敏	宇治市	なし	「江戸時代の蹴鞠文化と庶民」というタイトルで、江戸時代の蹴鞠の歴史に関する講演を行った。(文学部主催の文学部歴史文化ゼミナールにおける講演。)
文学部	歴史学科	講演会	尾下成敏	京都市	なし	「天皇と蹴鞠 - 16世紀・17世紀初頭を中心に -」というタイトルで、戦国織豊期の天皇が蹴鞠とどう関わったかについて講演を行った。
文学部	歴史学科	講演会	後藤敦史	宇治市	なし	「大阪湾からみる幕末政治史」というタイトルで講演を行った。大阪湾の海防や砲台を紹介しながら、幕末の政治史について講演した。
文学部	歴史学科	講演会	後藤敦史	京都市中京区	なし	「京都を守る大阪湾」というタイトルで講演を行った。幕末における京都警衛と大阪湾防備を関連付けながら幕末政治史について講演した。
文学部	歴史学科	講演会	後藤敦史	京都市山科区	なし	「近代の山科」というタイトルで、オンデマンドによる動画配信形式で講演を行った。「山科検定」に関連付けて、近代の山科の歴史を紹介する講演会。
文学部	歴史学科	京都府警へのレクチャー	杉山隆一	京都市	なし	京都府警山科署の外事担当署員を対象に、中東情勢ならびにイスラム教徒への対応に関するレクチャーならびに質疑応答を二回に渡り行った。
文学部	歴史遺産学科	全国伝統的建造物群保存地区協議会 総会・研修会講演等	村上裕道	兵庫県 丹波篠山市	大学院 1名	重要伝統的建造物群保存地区が所在する市町村及び都道府県・文化庁が集う全国研修会において、基調講演及び兵庫県内 5 市長によるシンポジウムのコーディネーターを務めた。
文学部	歴史遺産学科	文化財保存活用地域計画連絡協議会 基調講演	村上裕道	京都市	なし	文化庁が主催する都道府県・市町村文化財担当者による文化財保存活用地域計画に関する研修会において、同地域計画の意義とその活用策について講義した。
文学部	歴史遺産学科	アジア太平洋地域における若手文化財担当者への講演・現地案内	村上裕道	兵庫県神戸市	なし	アジアユネスコセンターが主催する文化財専門家研修会において、アジア太平洋地域の政府文化財担当技官 (約 20 名) 向けに「伝統的建造物群の保存と防災」について、講演及び現地見学会を開催した。
文学部	歴史遺産学科	福島県・福井県・愛知県・大阪府・兵庫県におけるヘリテージマネージャー養成・スキルアップ講習会の講師	村上裕道	福島県郡山市 福井県福井市 愛知県名古屋 大阪府大阪市 兵庫県神戸市	なし	文化庁が各都道府県に補助等支援するヘリテージマネージャーの育成講習会において、5 府県について、講師を務めた。
文学部	歴史遺産学科	金沢職人大学校において、歴史的建造物の被災調査・復旧支援の仕組みに関する講演	村上裕道	石川県金沢市	なし	金沢市が主催する金沢職人大学校において、建設会社・設計事務所職員及び市町村建築技術職 (約 50 名) 向けの歴史的建造物に係る地震対応策について講演を実施した。
文学部	歴史遺産学科	文化財保存活用地域計画学習会の開催	村上裕道 中久保辰夫 南健太郎	滋賀県 滋賀県文化財保護協会 滋賀県米原市・栗東市	学部 4 名 大学院 2 名	本学と連携協定を結んでいる公益財団法人滋賀県文化財保護協会と共同で、米原市・栗東市を事例に、滋賀県内における市町村文化財担当職員に向けて「文化財保存活用地域計画の推進」方策について学習会を開催した。
文学部	歴史遺産学科	観光庁外国人旅行者周遊促進に係る事業採択に関する審査	村上裕道	リモート	なし	訪日外国人旅行者周遊促進事業費補助金の選定作業に係る審査を実施した。
文学部	歴史遺産学科	文化遺産の防災に関する有識者会議における意見開陳	村上裕道	奈良県奈良市 国立奈良文化財研究所	なし	国立文化財機構文化財防災センターが主催する有識者会議において、文化財防災センターが実施する事業内容の改善策について意見を述べた。
文学部	歴史遺産学科	兵庫県都市公園のあり方検討会 (明石公園) に関する協議	村上裕道	兵庫県明石市 兵庫県公園緑地課	なし	兵庫県が管理する明石公園の保存・活用に関する指針策定に向けて、市長・市民団体代表者・行政 (県・市)・専門家による連続協議を実施した。
文学部	歴史遺産学科	兵庫県が実施するビンテージ建物リノベーションプロジェクト委員会の開催	村上裕道	兵庫県姫路市 兵庫県播磨県民センター	なし	兵庫県中播磨県民センターが実施する歴史的建造物のリノベーションアイデアコンテストの実施に向けて、意見・助言を行った。
文学部	歴史遺産学科	文化財保存活用地域計画・文化財保存活用計画の策定	村上裕道	兵庫県姫路市・淡路市・明石市・福崎町・高砂市・群馬県嬬恋村 (リモート)・熊本県南阿蘇村 (リモート)	なし	文化庁が推進する文化財保存活用地域計画及び文化財保存活用計画の策定に向けて指導・助言を行った。
文学部	歴史遺産学科	まちあるきデジタルツアーの策定	村上裕道	兵庫県高砂市	なし	兵庫県高砂市、甲南女子大学メディア表現学科と協働で、高砂市を舞台にデジタルツアーの手法開発を実施した。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	活動の内容や成果
文学部	歴史遺産 学科	子どもの知的好奇心をく すぐる体験事業	中久保辰夫	京都府	なし	京都府教育委員会が実施する京都府下の小中高校生対象の模擬授業。10月10日に京丹後市立橋小学校6年生1クラスを対象に行った。
文学部	歴史遺産 学科	兵庫県立考古博物館春季 特別展「古墳時代の技術 革新」講演会	中久保辰夫	兵庫県	なし	兵庫県立考古博物館春季特別展「古墳時代の技術革新」講演会において、「海を渡って来た物と技術」と題する発表を6月10日に行った。
文学部	歴史遺産 学科	今城塚古代歴史館ハニワ の日記念講座	中久保辰夫	大阪府高槻市	なし	2023年8月26日に今城塚古代歴史館ハニワの日記念講座において、「今城塚古墳から出土した土器とよみがえる大王の饗宴」と題する講演を行った。
文学部	歴史遺産 学科	世界遺産「百舌鳥・古市 古墳群」の魅力を味わう 市民講座	中久保辰夫	大阪府羽曳野市	なし	2023年10月28日に世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の魅力を味わう市民講座(第1回)で「古墳時代のものづくりと古市古墳群造営勢力の戦略」と題する講演を行った。
文学部	歴史遺産 学科	公益財団法人滋賀県文化 財保護協会 連続講座 2023	中久保辰夫	滋賀県	なし	2023年11月25日に公益財団法人滋賀県文化財保護協会の連続講座2023 第6講において、「古代の食を復元する一食文化からみるSDGs-1」と題する発表を行った。
文学部	歴史遺産 学科	アートロードなぎつじ	中久保辰夫	京都市山科区	6名	2023年10月にアートロードなぎつじに山科区出土古代瓦の展示を行った。

総合心理 学部	総合心理 学科	キンダーカウンセラー 派遣事業研修	菅野信夫	大阪府・京都府	なし	大阪府・京都府の各私立幼稚園連盟が行っているキンダーカウンセラー派遣事業のスーパーヴァイザーとして、それぞれ年3回ずつ、派遣されるキンダーカウンセラー(臨床心理士)と派遣先の幼稚園園長を対象に子育て支援に関する研修会を開催した。
総合心理 学部	総合心理 学科	家庭裁判所調査官研修	菅野信夫	大阪家庭裁判所	なし	大阪家庭裁判所調査官を対象に、幼児・児童の見立てと対応について講義を行った。
総合心理 学部	総合心理 学科	保育コンサルテーション	宮井研治 濱田智崇	京都市山科区 滋賀県草津市	なし	草津市立こども園4か園、山科区内こども園1か園にて、統合保育に関するコンサルテーションを実施した。

経済学部	経済学科	滋賀県公共事業評価監視 委員会	吉川英治	滋賀県	なし	公共事業評価監視委員会に経済分野の委員として参加した。
経済学部	経済学科	甲賀市入札監視委員会	吉川英治	滋賀県甲賀市	なし	入札監視委員会の委員長を務めた。
経済学部	経済学科	米原市国民健康保険運営 協議会	吉川英治	滋賀県米原市	なし	国民健康保険運営協議会の副委員長を務めた。
経済学部	経済学科	総務省自治大学校講師	岡田知弘	全国の都道府 県、市町村	なし	総務省の自治大学校において、「地域産業政策」をテーマにした研修講師を行った。
経済学部	経済学科	砺波散村地域研究所運営 協議員	岡田知弘	富山県砺波市	なし	砺波市市立散村地域研究所の運営活動に従事した。
経済学部	経済学科	京都市「東山の未来」区民 会議	岡田知弘	京都市東山区	なし	東山区の基本計画を見直す区民会議の議長を務めた。
経済学部	経済学科	熊本県中小企業家同友会	岡田知弘	熊本県	なし	国内各地におけるコロナ禍での地域課題と今後の中小企業者運動の在り方について講演し、助言を行った。
経済学部	経済学科	長岡京市中小企業振興推 進会議委員	岡田知弘	長岡京市	なし	長岡京市の中小企業振興推進会議会長を務めた(2022年12月以降)
経済学部	経済学科	近畿農政局技術評価委員	岡田知弘	近畿一円	なし	農林省の土地改良事業の事前、事後評価に専門委員として参画した。
経済学部	経済学科	北海道旭川市議会	岡田知弘	岩手県 陸前高田市	なし	中小企業振興基本条例制定に関わるレクチャと助言を行った。
経済学部	経済学科	福井市役所若手ナッジユ ニット	牧和生	福井県福井市	なし	福井市役所の若手職員で結成されたナッジユニットに関連して、行動経済学およびナッジについて講演を行った。
経済学部	経済学科	香川県丸亀市産業振興推 進会議委員	小山大介	香川県丸亀市	なし	丸亀市において産業振興推進会議の会長を務めた。
経済学部	経済学科	京都府与謝野町産業振興 会議委員	小山大介	与謝野町	なし	与謝野町において産業推進会議の委員を務めた。
経済学部	経済学科	京都府与謝野町「よさの 未来大学」ワークショップ への参加	小山大介	与謝野町	5名	11月、12月の2回、京都府与謝野町において地域経済を考えるワークショップ「よさの未来大学」に学生とともに参加。他大学学生、高校生、事業者、行政関係者とともに、地域について考えた。
経済学部	経済学科	全国中小企業家同友会全 国協議会	小山大介	山口県山口市	なし	8月31日、山口市にて全国中小企業家同友会全国協議会が主催する第8回経営労働問題全国交流会にて、基調講演を行った。
経済学部	経済学科	京都中小企業家同友会	小山大介	京都市	なし	京都中小企業家同友会が主催する「2023 中小企業魅力発信研修交流会」にて講演を行った。
経済学部	経済学科	NPO法人 使い捨て時代 を考える会	平賀緑	京都市	なし	アーカイブ事業、50年史編纂を手がけた。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	活動の内容や成果
経営学部	経営学科	「ルシオール・フェスティバル」の運営	木下達文	滋賀県守山市	5名	守山市による音楽によるまちづくり支援を行った。立命館守山会場を中心に学生も事前研修および本番でのイベントマネジメントを体験的に学ぶ機会となった。
経営学部	経営学科	山科検定の運営協力	木下達文	京都市山科区	なし	山科区が実施するご当地検定である。開催方法等についてのアドバイスを行っている。年々受験者数が減っていることと、とくに若者の参加が少ないため、認知の広がりについての検討を行った。
経営学部	経営学科	安土城再建プロジェクト協力	木下達文	滋賀県 近江八幡市	なし	近江八幡市安土町において取り組まれている安土城再建プロジェクトを実施する「安土城再建を夢見る会」の運営サポートを中心に行なった。顧問として参加。滋賀県立安土城考古博物館運営懇談会委員。
経営学部	経営学科	安土城考古博物館展示リニューアル事業協力	木下達文	滋賀県	なし	滋賀県立安土城考古博物館の老朽化にとまじり、展示の全面リニューアル事業の協力をを行う。過去に博物館展示論で学生による事業評価協力をするなどしており、その反映をしている。今年度は実施設計を固めた。
経営学部	経営学科	特別史跡安土城跡整備基本計画策定協力	木下達文	滋賀県	なし	滋賀県が昨年度より取り組んでいる特別史跡安土城跡整備基本計画策定検討会議に委員として参加。敷地所有者との連携がうまく進んだことにより、未発掘の地域が多く残る安土山の今後の発掘の方向性を検討した。昨年度で計画を終え、2023年10月から整備を開始するに至った。
経営学部	経営学科	デジタル技術を活用した「幻の安土城」見える化基本計画協力	木下達文	滋賀県 近江八幡市	なし	滋賀県が本年度より取り組んでいるデジタル技術を活用した「幻の安土城」見える化基本計画検討懇話会に委員として参加。資料不足など多くの問題で再建が難しい安土城を、デジタルで復元していくという事業への協力。本年度は具体的なエリアの設定やシステムについての調整を行った。
経営学部	経営学科	滋賀県内における博学連携事業への協力	木下達文	滋賀県	なし	滋賀県の文化政策（主に博学連携事業）を担う中間支援組織「滋賀次世代文化芸術センター」の事業協力をを行う。主に文化施設と学校をつなぐ「連携授業」の在り方について様々な言及や広報事業の協力をを行う。理事として参加。事業が20年を超えてきたため、来年中には事業を集約した本の発刊を目指している。
経営学部	経営学科	客引き行為等対策審議会への協力	木下達文	京都市	なし	京都市の繁華街における客引き行為を禁止する条例があるが、いまだに客引きが絶えない現状を検討する審議会の委員として参加。現状分析並びに今後の対策について検討を行った。とくに、学生の客引きが多いため、大学向けの広報についてのアドバイスを行った。

工学部	情報工学科	電子情報通信学会 HCG シンポジウム 2023	伊藤京子	福岡県北九州市	なし	電子情報通信学会 HCG シンポジウム 2023 の実行委員長として、発表件数 113 件（セッション数 15）、招待講演 1 件、チュートリアル講演 1 件のシンポジウムを開催し、参加者数 200 人超のシンポジウムを運営した。
工学部	情報工学科	中小ものづくり DX 推進アドバイザー派遣事業審査員	加藤丈和	京都府	なし	京都府内の中小工場の DX のためにアドバイザーを派遣する事業。派遣先工場と派遣アドバイザーのマッチング審査を行なった。
工学部	情報工学科	京都市立東総合支援学校	加藤丈和 杉浦昌	京都市山科区	なし	学校を訪問し、校長や教員と可能な貢献策について議論した。校長から可能性を示された支援学校の教職員を対象とする ①3D プリンタセミナー ②マイコンセミナーについて提案中。
工学部	情報工学科	みらい食堂	杉浦昌	京都市 伏見区醍醐	1名	12月17日(日)に「醍醐いきいき市民活動センター」で開催された「みらい食堂」に情報工学科1回生が作成したマイコン制御によるハンドベル演奏システムを展示した。
工学部	情報工学科	京都府立菟道高等学校 模擬授業	工藤寛樹	京都市	なし	「人のセンシングとAI」と題し、コンピュータが現実空間で発生する情報をデータとして扱う仕組みから生成AIなど近年のAI技術に関連した内容を扱った模擬授業を菟道高校2年生21名に向けて行った。
工学部	情報工学科	滋賀県立水口東高等学校 模擬授業	工藤寛樹	滋賀県甲賀市	なし	「情報科学と暗号」というテーマで古代に使用された暗号から、現代のコンピュータによる通信で使用される暗号まで暗号の歴史と仕組みを解説する模擬授業を水口東高校の1,2年生計35名を対象に行った。
工学部	情報工学科	The 14th International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking 組織委員	工藤寛樹	京都市	5名	京都市にて開催された一般社団法人情報処理学会主催の国際学術会議にて運営委員として開催運営に携わった。情報工学科の学生5名が学生スタッフとして運営に協力した。
工学部	情報工学科	情報学教育研究センター開設記念講演会	東野輝夫 濱口清治 大場みち子 伊藤京子 学術振興課	京都市中京区	なし	本学の情報学教育研究センターの活動内容紹介、大学院研究科紹介、リスクリング教育事業の紹介と、「AIは世の中をどう変えるか-産業・文化・教育などへの影響-」（東京大学教授・松原仁氏）と題した記念講演会を実施した。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	活動の内容や成果
工学部	建築デザイン学科	京都市都市計画局指定管理者選定等委員会	松本正富	京都市	なし	京都市営住宅等の指定管理業者の選定委員を務めた。
工学部	建築デザイン学科	駅ナカアートプロジェクト実行委員会	河野良平	京都市	なし	駅ナカアートプロジェクトの実行委員会及びワーキンググループの会議に参加した。
工学部	建築デザイン学科	京都府建築工事紛争審査会委員	鈴木克彦	京都府	なし	委員として建築工事に関する当事者間の紛争を解決させるための調停審議を行った。
工学部	建築デザイン学科	京都府建築審査会委員	鈴木克彦	京都府	なし	副会長として、建築基準法に基づき建築許可が必要な建築物に対する可否や同意、不服申し立てなどの審査請求に対する議決等を行った。
工学部	建築デザイン学科	大阪府建築協定地区連絡協議会特別顧問	鈴木克彦	大阪府	なし	大阪府下 340 地区の建築協定地区で構成される連絡協議会の特別顧問として建築協定の運営指導を行った。また、令和 5 年度総会において基調講演を行った。
工学部	建築デザイン学科	市民シンポジウムの開催	鈴木克彦	京都市	なし	「高経年マンションから学ぶ長寿命化の技」と題した市民シンポジウムをウィングス京都(京都市中京区)にて開催し、コーディネーターを務めた。
工学部	建築デザイン学科	城陽市東部丘陵地整備委員会委員	鈴木克彦	城陽市	なし	新名神高速道路のスマートICの開通に伴って開発が進む城陽市東部丘陵地の開発方針について審議を行った。
工学部	建築デザイン学科	奈良県建築士審査会	西山紀子	奈良県	なし	委員として、二級建築士試験、および、木造建築士試験が適正に実施されたかの審査を行った。

看護学部	看護学科	京都市版 IHEAT 活動	黒瀧安紀子 河原宣子 福田沙織	京都市	なし	京都市内にある大学の有志で京都市版 IHEAT が結成され、活動の振り返り調査を実施している。
看護学部	看護学科	京都市版 IHEAT シンポジウム	黒瀧安紀子	京都市	なし	IHEAT 活動の中で作成した啓発パンフレットについての説明と、IHEAT 活動における大学での取組、活用と今後への課題 ー京都橋大学においてーを講演した。
看護学部	看護学科	令和 5 年度 下京区訪問看護ステーション有志勉強会	黒瀧安紀子	京都市	なし	訪問看護ステーションの BCP 作成を目的とした毎月 1 回行われる勉強会に参加し、共に勉強しながら、助言等を行った。
看護学部	看護学科	京都市伏見区保健活動研修会	黒瀧安紀子	京都市伏見区	なし	災害時の保健師活動と保健活動マニュアルの活用についての講義を実施した。
看護学部	看護学科	京都市右京区研修会	黒瀧安紀子	京都市右京区	なし	アクションカードの作成のワークショップと訓練によるアクションカードの見直しを実施した。
看護学部	看護学科	箕面市プラス We	黒瀧安紀子	大阪府箕面市	なし	発達や精神に課題のある方のグループホームを運営する NPO 法人の総会にて、災害時の備えや個別避難計画についての講演会を行った。
看護学部	看護学科	京カレッジリカレント教育プログラム	黒瀧安紀子	京都市	なし	「現代の対人援助に必要なことー新しい領域と課題の生成をめぐってー」のプログラムの中で、「対人援助に関わる人が”受援”するとき」をテーマに講演を行った。
看護学部	看護学科	京都市府伏見区報酬支所研修会	黒瀧安紀子	京都市伏見区	なし	災害時の保健師活動と保健活動マニュアルの活用、ワークショップを実施した。
看護学部	看護学科	箕面肢体不自由父母の会	黒瀧安紀子	大阪府箕面市	なし	2021 年、2022 年に行った個別避難計画の講習会を基に、実際に避難するためのネットワークづくりと避難訓練の計画を行った。
看護学部	看護学科	兵庫県保健医療部の令和 5 年度災害時の保健活動研修会	黒瀧安紀子	兵庫県神戸市	なし	災害時の保健活動に関する講義と演習を行った。
看護学部	看護学科	京都市健康福祉部保健師研修会	黒瀧安紀子	京都市	なし	災害時の保健師活動と保健活動マニュアルの活用のための演習を行った。
看護学部	看護学科	第 19 期 小児在宅ケアコーディネーター研修会	堀妙子 伊藤弘子 藤谷菜々美	全国	3 回生 10 名 4 回生 10 名	全国の小児の在宅ケアに関わる看護職を 38 名を対象とし、2023 年 7 月 29 日・30 日、9 月 23 日、11 月 25 日の全 3 回の研修会を京都橋大学にて実施した(一部オンライン参加もあり)。
看護学部	看護学科	京都橋学園保育事業部主催(草津市後援) たちばな親子セミナー	下田優子	滋賀県草津市	なし	京都橋学園保育事業部主催の子育て支援事業として開催された地域の未就園の親子向けの講演会にて、①今どきの子育て事情②子どもの育ち③夫婦の役割分担④ワークライフバランスに関する講演を行った。
看護学部	看護学科	京都市下京区役所保健福祉センター保健師等業務研修会	下田優子	京都市下京区	なし	下京区より依頼を受けて、区役所保健福祉センターの保健師、ケースワーカー等を対象に「～あなたは誰のために記録を残していますか?～支援が見えるわかりやすい記録の書き方を学ぼう」と題した講義を 3 月に実施した。
看護学部	看護学科	安朱学区福祉イベント「こころもからだも健康で来て 観て 笑顔で」	松本賢哉 征矢野あや子 川村晃右 深山つかさ 小西奈美	京都市山科区	4 回生 22 名	安朱学区が行う福祉イベントに参加した。骨密度や脳年齢、握力、身長体重等の測定を学生とともにを行った。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	活動の内容や成果
健康科学部	理学療法学科	守山市地域在住高齢者体力測定会	宮崎純弥	滋賀県守山市	10名	滋賀県守山市地域包括支援センターが主催する健康のび体操教室に参加する高齢者に対して教室開催時に体力測定を実施した。参加した学生は与えられた測定方法を事前に練習し測定会に参加するなど積極的に行動してくれた。高齢者とも交流ができ、良い教育の機会となった。
健康科学部	理学療法学科	伏見区の高齢者を対象としたたちな健康体操の講演	安彦鉄平	京都市伏見区	なし	高齢者約60名を対象に、伏見区本所包括支援センター主催のはつらつ体操講義として、「たちなタオル体操」の紹介および介護予防に関する講演を行った。健康寿命の延伸、運動の重要性などを中心に講演を行い、その後、たちなタオル体操を行った。
健康科学部	理学療法学科	伏見区の高齢者の健康に向けた「たちなタオル健康体操」の講演	安彦鉄平	京都市伏見区	なし	伏見区において公園体操として利用されているたちな健康体操の第2段として、たちなタオル健康体操を作成した。そこで、公園体操のボランティアリーダーを対象に、たちなタオル健康体操の紹介および介護予防に関する講演を行った。
健康科学部	理学療法学科	山科区鏡山学区主催「福祉の集い」での講演および健康チェック	安彦鉄平	京都市山科区	6名	山科区鏡山学区主催の福祉の集いにて「健康で歩き続けるための体操」をテーマに講演および体操を行った。福祉の集いの参加者は約200名程度であった。講演後には、学生は立ち上がりテストや体組成の測定を実施した。
健康科学部	理学療法学科	伏見区の高齢者に向けたオンラインでの講演および介護予防体操の実施	安彦鉄平	京都市伏見区	4名	伏見区の介護予防推進センター主催の介護予防の一環として、オンラインでの介護予防教室を開催した。対象者は、伏見区在住高齢者約6名および介護施設にオンラインで、実施した。学生は自己紹介および1分間スピーチなどを実施した。
健康科学部	理学療法学科	野洲市在住高齢者を対象とした健康調査	白岩加代子 菊地雄貴	滋賀県野洲市	38名	野洲市在住高齢者158名の健康調査を実施した。本活動にはヘルスプロモーション理学療法学応用演習を履修する38名の学生が測定スタッフとして参加し、学生の貴重な実務経験の場として有意義なものとなった。なお、本調査の結果については学生が分担してパンフレットを作成し、地域に向けて報告した。
健康科学部	作業療法学科	【AMED】長寿科学研究開発事業	小川敬之	国立研究開発法人日本医療研究開発機構	なし	厚生省、経産省などが主幹となり、国家レベルの研究事業の申請に対する検討を行う。この事業では、地域社会、共生社会の構築に関する研究事業を中心に審議する。
健康科学部	作業療法学科	【AMED】認知症対策官民イノベーション実証基盤整備事業	小川敬之	国立研究開発法人日本医療研究開発機構	なし	厚生省、経産省などが主幹となり、国家レベルの研究事業の申請に対する検討を行う。この事業では、認知症医療、ケアに関する研究事業を中心に審議する。
健康科学部	作業療法学科	【AMED】エビデンス構築事業	小川敬之	国立研究開発法人日本医療研究開発機構	なし	厚生省、経産省などが主幹となり、国家レベルの研究事業の申請に対する検討を行う。この事業では、非薬物療法のエビデンス創出に関する研究の審査を行う。
健康科学部	作業療法学科	京都府作業療法士会養成部部長	小川敬之	京都府作業療法士会	なし	京都府作業療法士会に所属する養成校の教員を中心に、卒前、卒後教育の在り方などを検討し、研修会などを実施した。
健康科学部	作業療法学科	認知症のひとと家族の会調査研究員	小川敬之	認知症のひとと家族の会	なし	老健事業の企画、調査、分析を行った。
健康科学部	作業療法学科	NPO法人地域支援センターつながり理事長	小川敬之	宮崎県門川町	なし	重層的支援体制構築事業（自治体委託事業）
健康科学部	作業療法学科	NPO法人地域共生開発機構副理事長	小川敬之	京都市右京区	あり	就労的活動、多世代交流事業
健康科学部	作業療法学科	NPO法人むすび理事	小川敬之	宮崎県椎葉村	なし	就労的活動、多世代交流事業、地域づくり、就労的活動支援
健康科学部	作業療法学科	宮崎県諸塚村認知症初期集中支援協議会委員	小川敬之	宮崎県諸塚村	なし	認知症初期集中支援会議、地域づくり
健康科学部	作業療法学科	日向市認知症地域支援体制推進会議委員	小川敬之	宮崎県日向市	なし	地域における認知症施策の検討
健康科学部	作業療法学科	東京都健康長寿医療センター研究所協力研究員	小川敬之	東京都	なし	老健事業、厚生労働科学研究等の協力、就労的活動への助言を行った。
健康科学部	作業療法学科	一般社団法人日本認知症ケア学会、機関認定委員会委員	菅沼一平	日本認知症ケア学会	なし	認知症ケアに特化した施設の認定委員として、助言・意見を行った。
健康科学部	作業療法学科	吹田市、認知症総合支援業務委託事業者選定等委員会委員長	菅沼一平	大阪府吹田市	なし	初期集中支援チーム、認知症地域支援コーディネーターの業務上の審査に際し、意見・助言を行った。
健康科学部	作業療法学科	吹田市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画推進委員会委員	菅沼一平	大阪府吹田市	なし	吹田市の福祉計画の審査委員として意見・助言を行った。
健康科学部	作業療法学科	吹田市認知症カフェ交流会、世話人	菅沼一平	大阪府吹田市	なし	吹田市認知症カフェの連絡協議会の世話人として意見・助言を行った。
健康科学部	作業療法学科	日本作業療法士協会生涯教育制度検討プロジェクト 班長	高畑進一	日本作業療法士協会	なし	日本作業療法士協会生涯教育制度検討プロジェクト班長として、全国の作業療法士を対象とする新たな卒後教育構想に基づく研修制度計画を作成した。現在、2025年度開始に向け、実行計画を定め、遂行中である。

学部	学科	活動名	担当	対象地域 または実施場所	学生参加	活動の内容や成果
健康科学部	作業療法学科	堺市教育委員会 自立活動アドバイザー事業外部専門家	原田瞬	大阪府堺市	なし	堺市教育委員会の事業で、市内の特別支援学校、小中学校において、巡回相談という形態で、対象児童の教科学習、自立活動の支援を行った。
健康科学部	作業療法学科	大阪府教育庁 高等学校支援教育力充実事業「医療専門家チーム」	原田瞬	大阪府	なし	大阪府教育庁の事業で、府内の高等学校において、障がいによる困難に関する判断や望ましい教育的対応についての専門的な指導助言を行った。
健康科学部	作業療法学科	NPO法人そいる 理事	原田瞬	兵庫県三木市	なし	児童発達支援事業の維持運営について理事業務を行った。
健康科学部	作業療法学科	京都市介護認定審査会	川崎一平	京都市	なし	京都市の附属機関として設置され、要介護者等の保健、医療、福祉に関する学識経験者によって構成される合議体(京都市介護認定審査会)の委員として要介護度の審査・判定に従事した。
健康科学部	救急救命学科	第72回滋賀 JPTEC プロバイダーコース タスク	関根和弘	滋賀県大津市	10名	滋賀県内の救急隊員の外傷初療の講習に手伝いとして参加した。
健康科学部	救急救命学科	笠原寺防災訓練炊き出し前準備	関根和弘	京都市山科区	4名	救護として参加した。
健康科学部	救急救命学科	勤修学区自主防災会リーダー養成研修会	関根和弘	京都市山科区 勤修学区	6名	勤修学区自治会を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	笠原寺防災訓練	関根和弘	京都市山科区	40名	地域住民を対象に炊き出し訓練やBLSなどの講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	勤修おやじの会学校キャンプ	関根和弘	京都市山科区	36名	子供たちのキャンプの救護を行った。
健康科学部	救急救命学科	小野おやじの水難事故安全教室	関根和弘	京都市山科区	13名	地域住民を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	勤修おやじの会主催 勤修夏祭り	関根和弘	京都市山科区	30名	勤修学区夏祭り時の救護を行った。
健康科学部	救急救命学科	山科たんたんおもちゃライブラリー夏キャンプ	関根和弘	京都市山科区	6名	夏キャンプの救護を行った。
健康科学部	救急救命学科	鴨川納涼祭救護	関根和弘 澤田仁 郷田爽真	京都市	20名	鴨川納涼祭の救護を2日間にわたって実施した。
健康科学部	救急救命学科	放課後等デイサービス funwari BLS	関根和弘	京都市山科区	6名	大宅学区内の住民を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	第73回滋賀 JPTEC プロバイダーコース タスク	関根和弘	滋賀県大津市	10名	滋賀県内の救急隊員の外傷初療の講習に手伝いとして参加した。
健康科学部	救急救命学科	京都府防災訓練トリアージ事前講習	関根和弘	京都府	20名	京都府防災訓練のトリアージ訓練講習に参加し、指導した。
健康科学部	救急救命学科	京都府防災訓練(亀岡市)	関根和弘	京都府	30名	京都府下防災訓練に傷病者役として参加した。
健康科学部	救急救命学科	勤修ふれあいの集い	関根和弘	京都市山科区	10名	勤修学区地域住民を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	京都市防災訓練	関根和弘	京都市	20名	京都市防災訓練の傷病者役として参加した。
健康科学部	救急救命学科	六兵衛公園地域ふれあい広場	関根和弘	京都市山科区	5名	山科区住民を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	ぐるっとふれ愛まちフェスタ	関根和弘	京都市山科区	10名	山科区住民を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	ふれあいやまちな区民まつり	関根和弘	京都市山科区	5名	区民祭りに救護として参加した。
健康科学部	救急救命学科	大宅学区防災訓練	関根和弘	京都市山科区	7名	山科区住民を対象にBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	JPTEC 滋賀医科大学コース	関根和弘	滋賀県草津市	7名	滋賀県内の救急隊員が参加する外傷標準化コースに傷病者役として参加した。
健康科学部	救急救命学科	第20回千里メディカルラリー	関根和弘 澤田仁	関西大学	100名	全国の医療チームが参加するメディカルラリーで模擬患者役として参加した。
健康科学部	救急救命学科	JPTEC 京都第一赤十字病院コース	澤田仁	京都市	12名	京都府内の救急隊員が参加する外傷標準化コースに傷病者役として参加した。
健康科学部	救急救命学科	おおやけこども園BLS	郷田爽真	京都市山科区	5名	保育士を対象としたBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	朱壺保育園BLS	郷田爽真	京都市	4名	保育士を対象としたBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	山科防犯ボランティア	郷田爽真 齋藤汐海	山科駅	30名	山科警察署と協働して痴漢の防止のキャンペーンを行った。
健康科学部	救急救命学科	円町まぶね隣保園BLS	郷田爽真	京都市	5名	保育士を対象としたBLS講習を行った。
健康科学部	救急救命学科	安朱小学校BLS	齋藤汐海	京都市山科区	7名	安朱小学校の教職員を対象にBLS講習を行った。

Ⅲ

自治体等との連携協力に関する 協定の締結



協定等

自治体等との連携協力に関する協定の締結

2012年度～2023年度

協定（連携）先	締結日	締結事項	備考
学校法人 昭和大学	2012年 1月16日	教育研究協力に関する包括協定を締結。 看護職および看護・医療のレベルアップへの取組、人事交流、看護に関する共同研究と地域連携などを推進。	 昭和大学との包括協定調印式
日本赤十字社 京都第二赤十字病院	2013年 1月21日	教育研究協力に関する包括協定を締結。 ○本学看護学部の主要実習病院としての連携強化 ○「京都第二赤十字病院特別奨学金制度」の創設（1学生約360万円） ○奨学金制度の創設に伴う新規推薦入試制度の導入 ○看護に関する共同研究および地域連携の推進、教職員の交流	 第二赤十字病院との包括協定調印式
京都市山科区	2013年 9月24日	本学と山科区は、地域連携・協力に関する協定を締結。 ○まちづくりの推進 ○地域産業の振興 ○教育、文化、生涯学習、スポーツの振興 ○医療・健康・福祉の向上 ○地域・社会に貢献できる人材の育成 ○防犯、防災、交通安全等の地域の安心・安全の推進	 山科区との協定締結式
社会福祉法人 京都博愛会 (京都博愛会病院)	2014年 3月5日	理学療法士養成および理学療法・医療をめぐる教育研究に関する事業の発展を目指し包括協定を締結。 ○本学健康科学部理学療法学科における教育・研究に関する事項 ○京都博愛会病院理学療法士および理学療法・医療のレベルアップのための支援に関する事項 ○理学療法に関する共同研究および地域連携に関する事項 ○教職員の交流に関する事項 ○その他必要と認められる事項	
社会福祉法人 大宅福祉会 (おおやけこども園)	2014年 6月1日	対人援助に携わる専門職者の養成ならびに看護・医療、保育・教育、臨床心理・発達心理をめぐる教育研究の振興のため包括協定を締結。 ○本学人間発達学部児童教育学科における教育・研究に関する事項 ○本学看護学部看護学科における教育・研究に関する事項 ○本学健康科学部心理学科および心理臨床センターにおける教育・研究に関する事項 ○大宅保育園の保育職および保育のレベルアップのための支援に関する事項 ○地域の子育て支援に関する事項 ○教育と研究の発展のため、その他必要と認められる事項	
滋賀県野洲市	2014年 6月17日	地域の高齢者のニーズに応えられる介護予防事業をめざし、地域の発展と地域活性化に必要な人材育成に寄与することを目的に協定を締結。 ○高齢者の介護予防に関する事項（一次予防事業の実施など） ○その他高齢者の健康・福祉の向上に関する事項 ○地域・社会に貢献できる人材の育成 ○その他両者が必要と認める事項	
京都市 醍醐中山団地町内連合会	2014年 10月30日	京都市、醍醐中山団地町内連合会と地域活性化に寄与する取り組みを目的とした連携協定を締結。 ○地域連携センター分室の開設 ○留学生が暮らす国際シェアルームの運営 ○住民との交流による地域貢献活動 ○地域コミュニティの再生と活性化 ○健康および福祉活動	 醍醐中山団地との協定締結式

協定（連携）先	締結日	締結事項	備考
滋賀県草津市	2014年 12月25日	<p>本学と滋賀県草津市は、子育て支援の充実を軸とした包括協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○幼児教育・児童教育に関する事業 ○生涯学習に関する事業 ○文化の振興に関する事業 ○産業の振興に関する事業 ○地域の活性化に関する事業 ○人材育成に関する事業 	 <p>草津市との協力に関する協定を締結</p>
大津市老人クラブ連合会	2015年 6月10日	<p>地域の高齢者のニーズに応えられる介護予防事業の実現および看護・医療をめぐる教育・研究の振興をめざし、地域の発展と地域活性化に必要な看護職者育成に寄与することを目的として協力協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○高齢者の介護予防に関する事項（一次予防事業の実施など） ○高齢者の健康・福祉の向上に関する事項 ○地域・社会に貢献できる看護職者の育成に関する事項（看護学実習の受け入れなど） ○その他両者が必要と認める事項 	
公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団 (京都市東部文化会館)	2015年 11月5日	<p>本学と京都市東部文化会館（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）は、連携に関する協定を、同振興財団長尾理事長、同大学細川学長出席のもと締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○文化芸術活性化パートナーシップ事業 ○文化・芸術の振興に寄与する人材の育成 ○学生の参加・学習 	 <p>京都市音楽芸術文化振興財団との連携に関する協定を締結</p>
和歌山県 和歌山県那智勝浦町	2016年 6月3日	<p>本学と和歌山県那智勝浦町は、和歌山県が進める「大学のふるさと」の趣旨に賛同し、三者協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域資源再評価および観光広報、教育研究提携 ○人的資源の交流を通じた人材育成 ○地域貢献活動の推進による地域文化の向上および振興 	 <p>那智勝浦町と「大学のふるさと」協定を締結</p>
京都市 京都市児童館学童連盟	2017年 7月28日	<p>本学と京都市児童館学童連盟および京都市は、児童館における学習支援事業に係る協定を締結。 京都市内の児童館において、学生ボランティアが子どもたちの勉強サポートや相談対応などの学習支援事業を展開する。</p>	 <p>児童館における学習支援事業に係る協定を締結</p>
京都府山科警察署	2017年 9月11日	<p>本学と京都府山科警察署は、国際分野を中心とした協力に関する協定を締結。 本学から山科警察署への英語教育プログラムの提供や、山科警察署から本学留学生への柔道・剣道等日本文化体験機会の提供などを行う。</p>	 <p>京都府山科警察署との協力に関する協定を締結</p>
京都市 全国認定こども園協会京都府支部	2017年 8月4日	<p>本学と全国認定こども園協会および京都市は、幼稚園教諭免許状更新の連携・協力に関する協定を締結。 これにより2017年度からの3年間、京都府内の認定こども園、京都市内の市立・私立幼稚園および市営・民間保育園の職員を対象とした幼稚園教諭免許状の更新講習を本学で実施する。</p>	 <p>京都の幼児教育・保育施設と幼稚園教諭免許状更新の連携・協力協定を締結</p>
株式会社ビバ	2018年 4月26日	<p>本学と株式会社ビバは、教育連携および地域活性化事業の展開に関する協定を締結。株式会社ビバが指定管理者として運営を委託されたスポーツ施設等において、学生の教育や共同研究等産学連携活動を行う。</p>	 <p>株式会社ビバとの連携に関する協定を締結</p>

協定（連携）先	締結日	締結事項	備考
福井県小浜市	2018年 3月29日	<p>本学と福井県小浜市は、幅広い分野で両者が有する資源を有効に活用し、活力ある地域社会の形成と振興に寄与することを目的に包括協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域振興を担う人材育成に関すること ○地域社会の活性化およびまちづくりに関すること ○教育および学習機会の提供に関すること ○産業振興に関すること ○情報収集および発信に関すること ○その他、目的を達成するために必要な事項に関すること 	 <p>小浜市との包括協定を締結</p>
京都市 京都市児童館学童連盟 京都造形芸術大学	2019年 1月21日	<p>本学と京都市、京都市児童館学童連盟、京都造形芸術大学は、学生ならではの発想や行動力を活かした児童の健全育成活動全体の活性化と大学生等の知識・技術の向上および人材育成を図るため包括協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童館等において実施する職業体験事業への大学生の派遣 ○学生ならではの発想や行動力を活かした児童の健全育成活動全体の活性化 ○大学生等の知識・技術の向上、人材育成 等 	 <p>京都市児童館等との職業体験に関する4者協定を締結</p>
京都薬科大学	2019年 3月18日	<p>本学と京都薬科大学は医学専門職の養成および医学分野における教育研究の発展をめざし、包括協定を締結。 その協定に基づき、合同多職種連携教育（IPE）を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○医療専門職の養成および医療分野における教育の発展に関する事項 ○学生および教職員の交流に関する事項 ○京都市山科区を中心とした地域連携に関する事項 ○医療分野における共同研究に関する事項 ○学内施設：設備の共同利用に関する事項 ○その他必要と認められる事項 	
守山市	2019年 7月18日	<p>本学と守山市は、相互の人的、知的および物的資源の活用により、地域の高齢者のニーズに応えられる介護予防事業をめざし、地域の発展と地域活性化に必要な人材育成に寄与することを目的に包括協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○高齢者の介護予防に関する事項（一次予防事業の実施など） ○その他高齢者の健康・福祉の向上に関する事項 ○地域・社会に貢献できる人材の育成 ○その他必要と認められる事項 	 <p>守山市との包括協定を締結</p>
イオンタウン株式会社	2019年 11月1日	<p>本学とイオンタウン株式会社は、同社が開業するイオンタウン山科榎辻において、それぞれが有する資源を有効活用し、地域の活性化、教育研究、生涯学習、文化および産業の振興、人材育成等において相互に連携・協力し、相互の発展および地域社会の発展に寄与することを目的に、主に次に掲げる事業の企画の企画、実施等について連携し、協力する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域の活性化に関する事業 ○教育研究に関する事業 ○生涯学習に関する事業 ○文化の振興に関する事業 ○産業の振興に関する事業 ○人材育成に関する事業 ○その他必要と認められる事業 	
株式会社ルネサンス	2020年 4月1日	<p>本学と株式会社ルネサンスは株式会社ルネサンスが開業する「スポーツクラブルネサンス・イオンタウン山科榎辻」において、それぞれが有する資源を有効活用し、地域の活性化、教育研究、生涯学習、文化および産業の振興、人材育成等において相互に連携・協力し、相互の発展および地域社会の発展に寄与することを目的として協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域の活性化に関する事業 ○教育研究に関する事業 ○生涯学習に関する事業 ○文化の振興に関する事業 ○産業の振興に関する事業 ○人材育成に関する事業 ○その他協議して必要と認める事業 	
大阪大学 データビリティフロンティア 機構	2020年 5月1日	<p>本学と大阪大学データビリティフロンティア機構に設置するライフデザイン・イノベーション拠点本部は、健康・教育・都市生活などのライフデザイン分野に関連するイノベーションの創出を目指して、連携協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○健康・教育・都市生活などのライフデザイン分野の共同研究に関する事項 ○研究に必要な施設・設備・備品の共同利用に関する事項 ○学生及び教職員の交流に関する事項 ○その他必要と認められる事項 	

協定（連携）先	締結日	締結事項	備考
日本電気株式会社 (NEC)	2020年 11月2日	<p>本学と日本電気株式会社は、産学連携によりAI・ITなど先端技術に関する教育・研究施設の整備および教育活動、次世代の学習環境の構築に係る研究活動について連携・協力するために協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○AI・ITなど先端技術の教育・研究に必要な施設・設備等の整備に関する事項 ○AI・ITなど先端技術人材教育に関する事項 ○次世代の学習環境構築に関する事項 ○その他必要と認められる事項" 	 <p>日本電気株式会社との連携・協力に関する協定を締結</p>
京都市	2021年 2月5日	<p>本学と京都市は、「大学のまち京都・学生のまち京都」の魅力向上に向け、ふるさと納税を活用した大学・地域の連携強化に関する協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ふるさと納税の活用促進に関すること ○大学・学生との地域の連携強化等に関すること ○その他双方が必要と認めること 	
医療法人社団洛和会	2023年 1月30日	<p>本学と医療法人社団洛和会は看護職者の養成、看護・医療をめぐる教育・研究の振興および地域医療の発展を目的に包括協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○看護職者養成のための看護学実習の受け入れなど教育・研究活動への支援に関すること ○看護職および看護・医療のレベルアップのために支援に関すること ○教育・研究および地域医療の発展のため、その他必要な連携と協力を推進すること 	
京都府与謝野町	2023年 10月16日	<p>本学と与謝野町は相互の人的、知的および物的資源を有効に活用し、地域社会の活性化と振興、および人材育成に寄与することを目的に覚書を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域社会の活性化と振興に資する地域経済分析の実施 ○地域社会に貢献できる人材の育成 ○その他、甲と乙が必要と認める事 	 <p>与謝野町との連携・協力に関する覚書を締結</p>
公益財団法人 滋賀県文化財保護協会	2023年 11月13日	<p>本学が公益財団法人滋賀県文化財保護協会と密接な連携・協力のもと、調査と研究、文化財の保存・活用および文化財を活かした地域づくり等に必須の地域人材育成に向けて相互に協力していくことを目的に協定を締結。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○滋賀県を中心とした歴史文化遺産の調査・研究に関する事業 ○文化財の保存と活用や地域の活性化に関する事業 ○上記2つを基盤とした人材の育成に関する事業 ○その他両者が協議し、必要と認める事業 	 <p>公益財団法人滋賀県文化財保護協会との連携・協力に関する協定を締結</p>

2023 京都橘大学
「地域連携型教育プログラム」実績集
(2023年4月～2024年3月)

発行日 2024年3月31日

発行 京都橘大学 地域連携センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

TEL : 075-574-4186 FAX : 075-574-4149

URL : <https://www.tachibana-u.ac.jp/>

E-mail : aca-ext@tachibana-u.ac.jp



変化を楽しむ人であれ

京都橘大学